
彼と彼女の百年物語

スモーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼と彼女の百年物語

【Nコード】

N2489T

【作者名】

スモーク

【あらすじ】

彼は彼女を守る為に力を求め、彼女は記憶を求めて彼と共に歩む。

『ヒロキ・アカギ』と『リーチエ・アウラード』

世界を渡る二人は、旅の果てに何を見るのか——？

現在『魔法少女リリカルなのは』編進行中……

処女作& amp; 作者は素人です。御指摘や御感想などお待ちしております

います。

終わりの夢、始まりの朝（前書き）

やっと修正出来た……

コピーでのやり方をついさっき理解したスモークです

アホじゃ、俺……

終わりの夢、始まりの朝

雲一つ無い青空の下、草原に一人の男が佇んでいる。男は瞳を閉じ、腕を組んで微動だにしない。

男の傍らには身の丈程の大剣が突き刺さっている。陽の光を浴びて鈍く輝き、主と共に何かを待ち構えていた。

……一体どれくらいそうしていただろうか？

不意に男はカツと目を見開き、右手で大剣を掴んで抜き去る。

そのまま肩に担いで遙か地平線を睨みだした。

……すると地平線の彼方から、黒点が現れだした。次々と現れた黒点は大きく広がり、巨大な穴と化す。

巨大な穴から人が、悪魔が、天使が、様々な“モノ”が吐き出された。それらの姿形は違っても、遙か先に居る男に向けた殺意は共通している。

吐き出された“モノ”達は、その殺意を身に纏いながら男に向かって進み出した。

「……見知った顔や物ばかりだな、まったく」

その光景に男は左手で頬を掻きながら苦笑する。向かってくる“モノ”達は、全てが男と縁のある“モノ”達だった。共に苦難を乗り越えた仲間、何度も刃を交えた敵、騒いで笑い合った友。

その“モノ”達が持つ力も十分に男は理解している。

しかし、それでも――

「負けるワケには、いかねエな……ッ！」

――男は友や仲間を捨て、一人の女を選んだのだから。

「……………かかってこいやアアアアアアッ！！！」

男が咆哮を上げると同時に、“モノ”達は太陽に武器を煌めかせ、翼を広げ、牙を剥き出し、一斉に男に襲い掛かった。

「……………夢、か」

とある一軒家の一室。目を覚ました黒髪の少年は眠気でぼやけた視界で辺りを見回す。

時計を見れば午前8時ジャスト。起きるには丁度良い時間だと思いいベッドから下りて軽く頭を振り眠気を飛ばす。

「しかしあの夢……一体何なんだ？起きたらどんなのか忘れちゃうし、気味悪いな」

過去にも同じように夢を見た彼だが、決まって先程の夢だけ内容を忘れてしまう。

それからしばらく着替えながらも考えてみるが、

「おーーーーーい！朝ご飯だよーーーー！」

「……わかった！すぐに行く！」

階下から聞こえた声に返事をして、とりあえず頭を切り替える。着替えを済ませ、階段を下りる少年の鼻にトーストの香りが届く。リビングへのドアを開くと、テーブル上にはそれぞれトーストとベーコンエッグ、サラダが乗せられた皿が並んでおり、椅子には少年と同年代の容姿の赤髪の少女が笑顔で座っていた。

「おはよう、“ヒロキ”！」

「おう、おはよう“リーチェ”！」

挨拶を交わし、ヒロキと呼ばれた少年は席に着く。そして二人で手を合わせ、

「いただきます！」

合唱して朝食に取り掛かった。

食べようとした直前、ヒロキは夢の事をどうするか考えたが、無駄かと思いついに手を伸ばす。

今日も新たに、便利屋『Wild Card』の一日が始まる――

とある過去と、気分転換と仕事（前書き）

またまた修正しました

とある過去と、気分転換と仕事

朝食を済ませたヒロキは「修行してくる！」と、刀を持って外に行ってしまった。

結果、一人で電話番をする羽目にリーチエ。頬を膨らませて物凄く不満そうだ。

テレビ番組を観つつ電話番をしていたリーチエは、退屈な時間に欠伸を噛み殺し続ける。

だんだんと眠気が増して、目を覚まそうと顔をグイッと抓るも一向に効果が無い。

——そう時間も経たない内に、リーチエの意識は暗転した。

リーチエ・アウラードには記憶が無い

気がつけば何も無い荒野でポツンと突っ立っていて、自分の名前と言語、力以外は全く思い出せなかった。

手掛かりとなる“力”は恐ろしく、身の丈の三倍以上ある岩を軽く撫でただけで粉碎してしまった。

だから『自分』がどんな人間だったのかを知る為にリーチエは旅を始めた。

「誰か！私という人を知りませんか！？」

様々な世界を渡り歩き、道行く人々に『自分』について尋ねる。
数え切れないくらい鼻で笑われ、バカにされた。それでも知りたくて尋ね続けた。

「うるさい」と言われ殴られても、口汚く罵られてもリーチエは諦めはしなかった。

尋ね始めてかなりの年月がたった。

周りの町並みは変わり、人々の姿も変わっていく——リーチエを取り残して。

罵られ、一人で落ち込み過ごしていた時に寄り添ってくれた犬や猫、鳥達が消えた。

変人扱いされた自分の話を、疑う事なく親身になって聞いてくれた老婆が亡くなった。

「また明日も頑張ろう」、と何度も思わせてくれた美しい夕日が見えた場所が消えた。

けれどリーチエだけは変わらなかった。

まるで彼女だけ世界から切り取られたように……………

老いも衰えない自身の体を見て、リーチエは恐怖に包まれた。

明らかに人とは掛け離れた体に、力に、震えた。

『自分』は人間ではないのか？この力はその証拠なのか？どうして『自分』は死なないのか？

頭にぐるぐると疑問が飛び交い、心が押し潰されそうになる。

「私、このまま誰とも一緒に過ごせないのかなあ……………？」

夜、誰も居ない公園でリーチェは自身を抱きしめる。
寒かった。どうしようもないくらいに体が——心が寒かった。

「そんなのヤだよ……………誰か、助けてよお……………」

今まで我慢してきた想いが涙となって溢れ出す。
気がつけば彼女は叫んでいた。周りなど気にしていられない。この想いをどうにかしないと、リーチェは壊れてしまいそうだった。

「もうイヤだよ！どうしてみんな死んじやうの！？どうして私は死ねないの！！？」

——私を置いてかないでよ！！」

想いは止まらず叫び続ける。

声が枯れそうになっても、涙でその美貌がグシャグシャになっても、止まりはしなかった。

「もう一人はイヤなの！！誰でも良いから私の傍に居て！！一人にしないでよ……………ツツツ！！！！」

——最後に一際大きく叫んだ瞬間、世界が白に染め上げられた。

「おーい……起きろ、リーチエ」

「ん……………」

体が揺れる感覚がする。

目を開くと、自分を心配そうに覗き込んでいる少年が居た。

……どうやら自分は寝てしまっていたらしい。

「あー……………ゴメンね？寝ちゃった」

「そんなのはどうだっていい。……今の俺の疑問は、どうして泣いてんだ？って事だ」

「へ？」と声を上げて目元に指を這わせる。僅かに水の感触がする事からどうやら本当に泣いていたらしい。

困ったように笑うリーチエはどう言い訳しようか考えていた。

家族同然な目の前の彼にあまり心配は懸けたくない為に、リーチエが思いついた瞬間、

「どーせ、昔の事でも思い出したか何かだろ？」

「う……………」

ズバリと言い当てられた。しかもグサツときた胸を押さえ、さも凶星というように顔を引き攣らせるリーチエ。ヒロキは溜息を吐き、リーチエの顔に両手を添える。……そしてそのまま頬を抓って引っ張った

「まったく……お前はズルズルズルと！」

「あうー！いひゃい、いひゃいっへ！」

縦縦横横丸書いてチョン、と引っ張りようやく手を放す。

「うー……！」と抗議の視線をぶつけるリーチエにヒロキはフン、と鼻を鳴らして、

「そついつ時には、気分転換しに行くぞ！」

そう言つて手を引きリーチエを立ち上がらせ、家から連れ出した半ば引きずるような形でヒロキはバイクに乗り込み、リーチエを後部に座らせ発進する

「ねえ、気分転換って……どこに行くの？」

何故かハイテンションなヒロキである。

これが女性か子供ならば可愛いげがあるのだが、生憎ヒロキは男で17歳。

……明らかに変人にしか見えない。

「ああ、喫茶店だ。『翠屋』っていう名前で、スイーツが絶品だと聞いたからな！」

まるで子供のようにはしゃぐヒロキを見て、リーチェも釣られて笑い出す。

こちらは見事に絵になっている。

「それ、自分が行きたいだけじゃない！」

「……………い、いやお前の事も考えてたよ？ホントダヨ？」

「何で最後だけ片言なのー！？」

……………でも、ありがとね」

不意に優しく呟かれた言葉に、ヒロキは気恥ずかしさからかスピードを上げる。

照れ隠しに気付いたリーチェはまるで悪戯っ子のように笑い、

「あれー？照れてるー？」

「…………さ、さっさと行くぞ！」

「ふふっ……おー！」

声を合図に、ヒロキは更にバイクの速度を上げた。

……その結果、法定速度をガン無視していた為にパトカーに追い回される羽目となるが。

「それで！本当は気分転換だけじゃないんでしょ！？」

不意に問い掛けるリーチェ。かなりの速度で走っている為に半ば叫んでいるが、それはヒロキも同じなのか、

「ああ！よく気付いたな！仕事も兼ねて、だ！！」

時はヒロキがリーチェを起こす前に遡る

普通に声を掛けても起きないリーチェにちよつとイラついたヒロキは揺すって起こそうと手を伸ばす。

肩に手が触れるか触れないか、そんな瞬間に電話がテーブルに置いてあった電話が鳴り響いた。

『あー……貴方の切り札、便利屋Wild Cardでございます！今日はどのような御用件でしょうか？』

依頼者はスクライアという遺跡発掘を生業とする部族の族長だった。

依頼内容は『ユーノ・スクライア少年の保護とジュエルシードというロストログアの回収』。

輸送中のジュエルシードが事故によってこの地球の海鳴という地に散らばってしまい、ジュエルシードの発掘指揮を執っていたユーノ少年は責任を感じて、たった一人で地球に回収しに行ってしまったそうだった。

『ロストログア』。

即ち過去の遺物と呼ばれる物。

リーチェの記憶に係るかもしれない、と感じたヒロキは二つ返事で依頼を請けた。

「色々な次元世界で便利屋やって良かったぜ！案外有名らしいからな、俺達は！」

「じゃあ、今回は当たりかもしれないね！」

様々な世界で便利屋として渡り歩いた二人。

逃げ出した105匹のペットを探して、その世界のあらゆる場所を飛び回った事もある、次元犯罪組織に丸腰で特攻を仕掛けた事もある。

便利屋を始めた理由は「色々な世界で色々な仕事をやれば、リーチエの記憶に関する情報が見つけれられるかもしれない」というヒロキの発想だった。

今まではスカばかりだったが、今回のターゲットはロストログア。過去の遺物を調べてみれば詳しい情報を手に入れられるかもしれない

「ターゲット、ジュエルシード！……ついでにユーノ少年！」

「待ってなさい、私の記憶！ゼーったいに取り戻してやるんだから！！」

——ここが、物語の始まり——

この先に待ち受ける困難を二人は知らない。
しかし、二人は負けはしないだろう。

——Wild Card（切り札）とはどんな逆境も打ち破るからこそ、そう呼ばれるのだから。

キャラ設定 7/12更新

ヒロキ・アカギ

性別 男

年齢 現在17歳

身長 177cm

体重 69kg

便利屋『Wild Card』店主で甘い物好きな少年

性格は楽天家、でも仕事は真面目にこなす。

甘党を自負する彼はトーストにジャムを必要以上に塗りまくる程だが、さすがに緑茶に砂糖とミルクを入れるような甘党ではない。

普通の黒髪黒目で、ちょっとタレ目ぎみ。左側の髪だけ軽く逆立てている。

15歳の時にリーチエと出会い、協力を約束して行動を共にしている。

好きな物は甘い食べ物、魚料理、努力家、リーチエとの時間。嫌いな物は話を聞かない人、キレやすい人、必要以上に辛い食べ物。

大食漢で稼ぎの3〜4割はコイツの食費に消える程。最近自重を心掛けている。

料理の腕前は普通よりちょっと上で、魚を使った料理が得意。

使用武器は日本刀「^{スミレ}菫」、または徒手空拳で戦う。

「赤城一刀流剣術」という剣術を使い、気を用いた素手での戦闘もかなりのレベル……さすがに次元を斬ったりは出来ないが。

リンカーコアを保持し、魔力もあるのだが、時空管理局に勤める一般魔導師以下の魔力量しかない。
ランクに直せば、D - の魔力量。例えるならば北斗の拳のモヒカンクラスである。

舞空術により空戦も可能で、気や魔力を探る索敵能力も持つ。

イメージキャラクターはアクセル・アルマー？（性格のみ）

リーチエ・アウラード

性別 女

年齢不詳 外見年齢18歳

身長 168cm

体重 ???

辛い物好きなヒロキの相棒で、性格は常に明るいが寂しがり屋な一面を持つ。

トーストにはキムチを乗せるといふ暴挙をやったのけるバカ舌で、過去に自作のキムチでヒロキを悶絶させた。（番外編『彼女の味覚とある日の風景』を参照）

赤髪ロングヘアーで赤目、普通に美女。

しかし自身を美少女と呼んだり、時折奇天烈な行動をするので残念な美“少”女となっている。

力に関しては巨大な岩を粉碎したり、鉄棒で逆上がりしたら誤って脚に魔力を纏ってしまい、そこから発生した魔力刃で星を三つ破壊した。犠牲者はゼロ、奇跡的である。

現在は腕輪型の制御装置とリーチ本人によってコントロールされている。

不老不死の疑惑があり、今まで死ねない自分に嫌悪している。

色々あってヒロキと出会い、協力を約束されてリーチも快諾。行動を共にするようになる。

料理の腕前はプロ級だが、必要以上に辛く作る事が多々ある。

好きな物は辛い料理全般、ヒロキとの時間。

嫌いな物は納豆、嘔つき、必要以上に甘い食べ物。

使用武器は特に無く、魔法で戦うのがメイン。

しかし、使う魔法は補助系が主体となっている。

外見イメージはKOS・MOS

Vertical line of text on the right side of the page.

番外編 彼女の味覚とある日の風景（前書き）

番外編です

ダンテ（トニーだけど）出したくて書いちゃいました

番外編 彼女の味覚とある日の風景

〈番外編1 彼女の味覚〉

——この話は二人が暮らし始めてまだ間もない頃のある日の朝食の話。

出されたトーストにヒロキはいつものように苺ジャムを塗りまくる。塗って塗って塗りまくる。そりゃもう塗り潰す勢いで塗りまくる。

その姿を見たリーチェはおもむろに冷蔵庫へと向かう。何か良い事を思いついたように顔を綻ばせながら……

——30秒後の事である。

「リーチェさん……つかぬ事をお聞きますが………」

「ん、なあに？」

「その手に持っているのは……もしかして、もしかしくても………」

「うん、キムチだよ？」

何かおかしい？、とでも言わんばかりに首を傾げる彼女。

……開いた口が塞がらないとはこの事か、文字通りにヒロキは口を開き呆然としている。

リーチエ・アウラードは辛い物好きだ。

以前にカレーを作ってもらった時には激辛のレベルを十段飛びした超激辛で、のたうちまわったのは記憶に新しい。

……人間ってマンガみたいに辛い物食べたら火を吹くんだな、って感動したくらいだ。ついでにあまりの辛さに感涙した。

そして彼女が手にしているキムチ、それもまた例に漏れずリーチエ特製のキムチだ。

何か色々な香辛料を入れていた憶えがある。……タバスコを入れて漬けていたのは目の錯覚と思っていたが。

「ヒロキも食べる？」

「い！？いや、遠慮させていただきます！」

顔を盛大に引き攣らせ、首をブンブン振りまくるヒロキ。

……露骨すぎだろ、コイツ。

さすがに気付いたのか、リーチエの表情がだんだん悲しげに沈んでいく。

「食べて……くれないの？」

あまりにも悲しそうに言うので、何故かヒロキに罪悪感が沸く。
リーチエがだんだんと涙目になっていくので、遂に耐え切れなくな
ったのか、

「う……まず、薬念に何を混ぜた？それだけ聞かせてくれ」

「！……んーとね……わさびでしょ、ハバネロとか唐辛子
系、山椒、胡椒、ガラムマサラ、タバスコ、チリに「いや、もうい
い。もういいです……」あ、そう？」

だんだん恍惚とした表情となっていくリーチエを対照に、冷や汗
が止まらないヒロキ。「ただ香辛料をブチ込んだだけじゃねエか！」
と言いたかったが、言えない。

言ったら痛い目を見そうな気がしたからだ。

「……味は、大丈夫なんだろうな？」

「むー、信用ないなあ……私は昨日食べたけど大丈夫だったよ？」

その返答にヒロキは少しだけ安堵する。

なにせ考え無しに辛い物を混ぜて漬けたのだ。化学反応とか起こ
してるんじゃないかと思ったが、その心配は無いらしい。

「じゃあ「えいっ！」ふむぐっ！？」

食べる、と言おうとした瞬間に口にキムチを突っ込まれる。抗議しようとしたら、今度は唇を摘まれた。

絶対吐き出させないという意味を感じ取ったのか、ヒロキは覚悟を決めて咀嚼する。

「……あれ？普通に食べ……るるるうあああああ
ああああ……ッ……！」

「ヒロキ？え、ちよつ……ヒロキ!？」

椅子から転げ落ち、真っ青な顔して呻き声を上げながら突然痙攣しだすヒロキ。

リーチェは慌てて近づき、その顔を覗き込むと――

「ぐが、げぎごがぐ……ぎぐ……がげご……ご……ッ……
……！」

歯をガタガタ震わせ、意味不明な言語を発する蒼白……というか真っ白なヒロキの顔があった。

「うえええええ!？ちよつと、しっかり!しっかりしてよ!……！」

この後、リーチエの懸命な介抱により回復はしたヒロキ。

しかし二週間は舌の味覚がおかしくなり、その間全ての飲食物を辛く感じるようになってしまい、それはそれは地獄だったという。

〈番外編2 ある日の風景〉

「だアアアアッ！」

気合いを声にして、ヒロキは疾走する。

その手には刀を持ち、その目には眼前の男を打ち倒さんとする意思に満ちていた。

対する男もまた、深紅のコートをはためかせ、身の丈程の長剣をその手に走り出す。

男の名はトニー・レッドグレイヴ。闇夜に映える銀髪的美丈夫である。

「ハアッ！」

「ラアッ！」

銀の光が交錯する。それも一つではなく、十数の斬撃が一瞬にて弾けて火花を散らす。

鉄すら容易く切り裂くトニーの剛の斬撃。それをヒロキは柳のようになんて流し、躲す。

「流してるだけじゃ、意味が無い……ぜっ！」

「うぉぁ……っ!？」

トニーの左手に、いつの間にか重厚な銃が握られていた。気付いたヒロキが咄嗟に飛び退いた瞬間、轟音と共に無数の弾丸が人を超えた連射速度で放たれる。

「ナメるなよ……ッ！」

驚きはしたが、ヒロキは頭を冷静に働かせる。
刀を高速で回転させ、迫り来る弾丸を絡めとる。
そしてそのまま刃を返し、トニーへと叩き返した。

トニーもまた予想していたのか、長剣を振り回してそれら全てを地へ叩き落とす。

その美貌に浮かんだ笑みは消える事なく、どこまでも大胆に、不敵に笑っていた。

その笑みを見たヒロキもまた、口元を歪めて同じ笑みを作り、

「「おおおっ!!」「」

二人は裂帛の気合を上げ、互いに懐へと飛び込んだ。

首を刈り取らんとするトニーの一撃を軽く屈んで回避、脚に向かい刀を振るうとトニーは跳び上がった回避する。

そのまま胴体を貫くと刃を翻したヒロキ。しかし、美丈夫の笑みは消えない。

そして気付いた。今度は両手に握られた銃口が彼を狙っていたのだ。

「Chew on this (コイツを喰らいな)!!」

腕をクロスさせる独特の構えから放たれる、先程を大きく上回る数の弾丸。少し頬を掠めたが今度は大きく飛び退いたヒロキ。

しかし、トニーの攻勢はそれだけでは終わらなかった。

着地したヒロキを、正しく必殺の刺突が人知を超えたスピードで彼の心臓へと迫っていた。

予想外の攻撃に目を見開くヒロキ。咄嗟に切っ先を斬り上げて弾き、心臓から照準を外す。

しかしそれでも、あまりの威力に弾ききる事は敵わず左肩を穿たれた。

「あ……がアッ！」

肩に焼け付くような激痛。続いて腹に衝撃が来た。

トニーの左手にまたもや銃が握られ、近距離で鉛弾のスコールを受けたのだ。

ゴボリ、と口から血の塊を吐き出すヒロキ。

……だがやられっぱなしではいられない。

ヒロキは自身の肩を貫いた長剣を左手で鷲掴み、そのガラ空きの胴体へと何発も叩き込んだ。

「ぐっ……おおっ！」

「だだだだだっ——だりゃあっ！」

苦悶の声を上げるトニー。そして最後にヒロキは剣を掴んでいた左手を放し、一際大きく蹴り飛ばした。

だが、ただやられて終わるトニーではない。

その蹴り飛ばされた瞬間に、彼もまたヒロキの胴体に渾身の蹴りをブチかましていた。

地を滑る二人。しかしトニーはすぐに立ち上がり、指を弾く。すると長剣がまるで意思を持ったかのように主の腕へと戻っていた。

口の中に溜まった血を吐き出し、自身の相手へ目を向ける。

そこには、抜き身の刀を手にしたヒロキが血塗れの状態で彼を見て笑っていた。

「（何がおかしい？……いや、待てよ？アイツ、いつの間に刀を……まさか！！？）」

トニーが何かに気付いた瞬間——彼の両肩から両の腰骨へと袈裟掛けに血が噴き出した。

「が……ッ！！チッ……やって、くれるぜ……まったく、よ……！」

「どーよトニー……俺の……勝ち、だ……ろ？」

対するヒロキもまた呼吸が乱れに乱れ、トニー同様に膝を着いている。

この勝負、勝利条件は「どちらかが膝を着くか負けを認めるまで」。二人は同時に膝を着いている。
実際には引き分けなのだが……

「ハッ……冗談じゃねエ。俺の勝ち、だろう？」

この二人、超が付く負けず嫌いだっただんだんと息が戻ってきたのか、会話もヒートアップしていく。

「いや、俺の方が膝を着くのが0.8秒遅かった！俺の勝ちだ！」

「いや、俺の勝ちだな。見てみるよ。俺の膝、まだ地面に着ききっていないぜ？」

「テメツ、汚エぞコラア！今上げたただけだろうが！」

ワーワーギヤーギヤー言い争う二人。傍から見れば子供のケンカだ。

——まあ、一人は15歳でもう一人は17歳、なのだが。

そんな二人を、見下ろす影が一つ。

トニーの倍程の背丈。まるで死神のような黒装束に巨大な鎌をその手に、建物の屋根から二人を見下ろしていた。

影は幽鬼のようにユラユラと、生気を感じさせない動きで鎌を振りかざして——屋根から飛び上がり、二人へ襲い掛かった。

影の狙いは銀髪の男。恨み、憎み、嫌悪してもしきれない裏切り者『スパード』の息子。

影は——悪魔は叫ぶ。あらん限りの憎悪を籠めて、その名を。

——ダアアアアンテエエエエツ！！

「うるせえッ！」

煌めく銀閃が鎌を腕ごと斬り落とし、そして轟音が響くと同時に鉛弾のキスを盛大に浴びせる。

成す術なく影は地面へと倒れ伏し、その身を砂塵へと変えて消えていった。

——だが、それだけでは終わらない。

消えた悪魔と同じ悪魔が、一つ二つと増えていき、いつの間にか二人は囲まれていた。

その数、優に百を超えている。並の人間ならば、ただ蹴られ、その体の余す所無く殺し尽くされるだろう。

「なあ、トニー？」

「何だ？」

「多く倒した方が、今回の勝者……ってのはどうだ？」

「そいつはいい。負けて泣くなよ？」

「ハッ！……どっちがだってーの」

——だがこの二人は並の人間に非ず。

まるでこの状況を楽しむかのように大胆に、不敵に、そして見る者を凍り付かせる程の凄惨な笑みを浮かべて、二人は同時に武器を構える。

「This party's getting crazy（イカレたパーティーの始まりだ）！」

トニーの声にヒロキは喉を鳴らして笑う。

この先続く言葉はよくトニーが口になっている、彼の本当の“決めゼリフ”とは異なる決めゼリフだ。

たまには乗るのも悪くない。そして二人は同時に口を開き、

「Let's rock（派手にイこうぜ）！」「」

その言葉を引き金に、二人は悪魔の群れへと駆け出した。

番外編 彼女の味覚とある日の風景（後書き）

ダンテの3での年齢は19歳だと考えている、スモークです

ちなみに1で28歳、4で35歳、2で42歳と想像（妄想）？しています……あれ、一定間隔？

バトル回、勿論二人は全力ではありません

ヒロキはちよつとした事情から力が出せず、トニーに至っては未だ本当の力に目覚めていませんしね

彼がスパイダの剣術を使用したら、かなり剣の腕に磨きをかけないとヒロキは防げないでしょう

仮に防げたとしても、刀折られてバツサリです

御指摘、御感想お待ちしております！

木ってぶつかると案外痛いよね？（前書き）

やっと出せました、原作キャラ！

木ってぶつかると案外痛いよね？

「焼き上がった生地の中に、トロリと舌触りの良いカスタードクリーム……」

クリームは甘すぎず、それを包み込む生地はありきたりな表現になつてしまふが『外はサクサク、中はふんわり』ってヤツだ。

——とどのつまり、俺が何を言いたいかっていうと………」

場所は喫茶店『翠屋』、二人の目的の一つだ。

ヒロキはガタリと音を立て、シュークリーム片手に席を立つ。
この気持ち、今言わずして何時言うというのだ！

大きく息を吸い今、万感の思いを言葉に込めて叫ぶ！

「んまあ~~~~~いつ……！」

店内に居た人々の視線がヒロキに集中、中には蔑みの視線すら混じっている。

……そりゃいきなり叫びだしたらそうなるだろう。

「あ、すみません……ゴメンなさい」

頭を下げ、静かに席に着く。向かいに座るリーチェは溜息を吐き、恥ずかしさから顔を赤らめ、

「この、バカヒロキ……………」

言われたヒロキも、恥ずかしくなって腕に顔を埋めて隠した……

「さて、と……目的をおさらいしようか」

シュークリームが山盛りに乗った皿。その中から通算15個目のシュークリームを頬張り、テンプルに身を乗り出すヒロキ。

リーチェもストロベリーパフェを口にしつつ、耳を傾ける。

「依頼者はスクライアの族長さん。

依頼内容は一人ジュエルシードの回収に地球に来ているであろうユーノ・スクライア君の保護、そしてジュエルシードの回収……」

「そして、私達の一番の目的が……………ジュエルシードの“調査”だね」

「その通り……っと」

シュークリームをもう一つ掴み取り、今度は一口で食べ切るヒロキ。

口一杯に広がる甘さに頬を緩ませながら、言葉を続ける。

「むぐ……解析魔法の術式プログラム、それはリーチェに任せる」

「うん、任されました。じゃあヒロキは……」

「俺は……やっぱり封印担当だな。」

魔力使って殴りつけるか斬りつけて、封印を仕掛けるさ。
「気が通用するのも知りたいし」

「そんなに魔力が無いのに大丈夫？」

悪戯っぽく笑いながらからかうリーチェ、ヒロキは仏頂面でそっぽを向く。

そう、ヒロキは魔力が無い……という言い方は語弊があるだろう。リーチェ基準では少なく、とりあえず管理局の一般的な魔導師よりちょっと低い、リンカーコアもあつて魔力はある。

ただ可能なのは封印、武器に魔力を纏わせるというちょっとした強化、そのまま撃ち出す砲撃のみだ。バインドの初歩でさえヒロキには難しい。

肉体に魔力を巡らせ強化という方法もあつたのだが、実際に試してみると、どうしてか極度に息苦しくなり行動が出来ず、断念した。

実際にはもう一つ別の“魔力”を持つてはいる。だが、これは封印には全く関係無く、今回の仕事には何の役にも立たないというのが過去により判明している。

……だっ たら意味無いじゃん。

「もう、子供みたいにむくれないの！」

そつぽを向くヒロキの頬をつつき、微笑みながらパフエに乗った
苺をクリームごとスプーンで掬い、彼の口元に差し出した。

「ほら、あーん♪」

「……………あーん」

にこやかに笑うリーチェの顔を見て、どうしてもよくなったのか小
さく笑い口を開く。

冷たい苺の味で、自然に笑みが深まる……………も、子供扱いにされた
事に納得いかないのか、眉をひそめて考え込んだ。

眉間にシワを寄せながらも口元は笑顔。怒っているのか笑ってい
るのか、よく分からないヒロキを見て、彼女もクスリ、と笑みを深
めた。

「……………ッ！」

その時、二人はほんの一瞬だが歪んだ魔力を感じる。
互いに顔を見合わせ、ヒロキは残ったシュークリームを一気に頬
張って財布をリーチェに投げ渡し、リーチェは受け取ったそれで勘

定を済ませる。

外に出てリーチェは辺りを見回しつつ魔力を感知する為に意識を集中させ、ヒロキも額に指を当てて目を閉じ集中する。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ねえ、ヒロキ？」

「ん？」

「…………その頬袋……………どうにか、ならない……………」

笑いを堪えつつ、ヒロキに問い掛ける。

ヒロキの顔は、一気にシークリームを詰め込んだせいでリスの頬袋みたいにパンパンに膨らんでいた。

「ふぁんへは（なんでだ）？」

「目に入っちゃうの！笑っちゃうの！」

「へほしへひゃいいひゃへえは（目を閉じてりゃいいじゃねエか）」

「

「頭に浮かんじゃうんだって！」

……ヒロキの意見も尤もだ。というか何故言葉が通じるのだろうか？

「うがーっ！」と怒鳴るリーチェを尻目に、もっきゅもっきゅと咀嚼。

ゴクンと飲み込み、そして一言。

「……あ、魔力感じなくなった」

「え？」

ヒロキの言葉に、ギギギ……と、まるで錆び付いたブリキの玩具のような音を立て、リーチェは辺りを見回す。

……全く感じない。残滓が在ってもいいはずだが、おそらく雑踏によって吹き飛んだのかもしれない。

魔力は感じなくなっただが、さっきまで騒いでいたので視線を四方八方からビシビシ感じるが。

「やっちゃったぜ」と言わんばかりの顔をしているヒロキ。口を開けて呆然とするリーチェ。

これからにちよつと不安を覚えたリーチェ。ヒロキは、

「……………ま、なるようにならあね」

あまり気にした様子もなく、小さく呟いた。

「……見つからないね」

「……ああ、見つからないな」

街中を歩く二人。ヒロキの「手掛かりもないから、とりあえず歩いて探そうか」という案で聞き込みをしつつ歩き回っている。

「はあ……疲れたあ……」

「だらしないぞ、まったく……」

ぐでぐだと頭を垂れるリーチエ、腰に手を当て空を仰ぐヒロキ。青い空が妙に憎たらしく、舌打ちして首を鳴らす。

八つ当たりだと理解してはいるが、どうにも止まらない。

「あの……?」

「「あゝあ?」「」

突如後ろからかけられた声に、田舎のヤンキーのようにガンを飛ばして振り返る。

見つからないストレスからか、少々頭のネジがぶっ飛んでいるようだ。

ガンを飛ばされた本人はそんな二人にちょっと引きながらも、

「あの私、高町美由希っていいます……何かお探しなら、手伝いましょうか？」

とても親切に話を持ちかけてくれた。

………二人が土下座するまで、後5秒。

海鳴にある公園のベンチ、話が盛り上がるリーチェと美由希。草の根分けて探すヒロキ。

「それじゃありーチェさんって、記憶喪失？」

「リーチェでいいよ？」

そうなのよね……ねえ、美由希？記憶喪失に効く薬ってないかな？」

「それはちよつと……無いんじゃないかな？」

「だよなー」と、あっけらかんと笑うリーチェ。実に楽しそうだ。そんなリーチェに苦笑する美由希。こちらもまた楽しそうだ。そんな二人を余所に、一人黙々と探し続けるヒロキ。実に楽し—

「——いワケねーだろうがアアアアア！」

ブチッ！と分けようと手にしていた草を一気に引きちぎり、シヤウト。

「どうしたの？」的な視線を送る二人が、どうもムカつく。

「何なのコレ、何なんだよコレ！？」

結局真面目に探してるのが俺だけって何！？美由希はともかく、リーチェは探せよ！

……いや何だその『コイツ何言ってるの』的な視線は！！？」

「え〜？いや、だってねえ……」

「リーチェは女の子だよ？女の子にそういう事やらせる気？」

「ねー？」と顔を見合わせる二人。ヒロキからしても仲良くなったらしく何よりだが、ちょっとキレた今はムカつく事極まりない。

「お前ら……ッ！この——」

口を開いたその瞬間、街に轟音が響いた。

ビルの上にて少女、『高町なのは』は愕然とした。

ジュエルシードによって巨大な木が生えだし、辺りに根を伸ばして街を破壊していく光景が瞳に映る。

コンクリートの地面を引き裂き、車等の障害物を跳ね飛ばし尚も伸びる巨大な根が見て取れる。

「酷い……」

「多分、人間が発動させちゃったんだ。

強い想いを持ったモノが願いを込めて発動させた時、ジュエルシードは一番強い力を発揮するから……」

肩に乗ったフェレット『ユーノ・スクライア』の言葉に、なのはの脳裏に一つの光景が浮かぶ。

それは、彼女の両親が経営する『翠屋』においての出来事。

友人の二人にユーノのが弄られている光景に苦笑いしながらも眺めていると、ほんの一瞬だけジュエルシードの気配を感じたなのは。彼女の父『高町士郎』がオーナーを務めるサッカーチームのキーパーの少年、彼から気配を感じたのだ。

——しかし、その時は気のせいだと半ば自身に言い聞かせるよ

うに考えた。考えてしまった。
その結果が眼前に繰り広げられる光景を引き起こしてしまったと
いうのならば、

あの時、彼に声をかけていれば。あの時、止めていれば――

「こんな事になる前に、止められたかもしれないのに……………」

「なのは……………」

ユーノが声をかけるものはの表情は暗い。

どう声をかけるべきか迷うユーノ……………だが、気付いた。

――彼女の握るレイジングハートの先端に、光が灯っているの
を。

「なのは……………」

「ユーノ君。こういう時、どうすればいいの？」

上げた顔には、迷いは無い。

落ち込むなら何時だって出来る。だが、今はそんな場合じゃない！
その瞳に意志を宿らせ、なのははユーノに問い掛ける。

「！ああ、うん……………封印するには、接近しないとダメだ。まずは元
となっている部分を見つけないと……………」

でもこれだけ広い範囲に広がっちゃうと、どうやって探しているか……………」

「元を見つければいいんだね」

「えっ…………？」

戸惑いつつも答えるユーノに、何でもないように返すのは。ユーノの疑問符を無視し、なのははレイジングハートを構え、大きく横に振るう。

巨大な魔法陣展開が展開され、

「リリカル・マジカル……………探して！災厄の根源を！！」

言葉と共に、レイジングハートを振り下ろす。

主の命令を受け、桜色の光が飛び散り、木を伝っていった。

「……………こりゃまた見事な木だ」

「きつと見たことない果实をつけるよ？」

「花の方にも期待が出来そうだな」

突如生え出した巨大な木を前に、軽口を叩き合うヒロキとリーチエ。

いつの間にかヒロキの手には刀が握られ、リーチエの掌に紅の光が灯る。

突然の事に困惑する美由希。そして気付いた。

——二人の頭上に木の根が振り下ろされんとするのを

「二人共、逃げて!!」

声を上げる美由希。しかし、二人は一向に動く気配が無い。

今から“神速”に入ったとしても、間に合わないだろう。

起きるであらう惨状を予想し、固く目を瞑る。

……………しかし、1分経とうと何かが起きたような気配は無い。

恐る恐る目を開く美由希。そこに見たのは——

「美由希——! やっほ——!」

「……………説明が面倒臭そうだな、コイツは」

こちらに手を振り呼びかけるリーチエと、溜息を吐いているヒロキ。そして何より、振り下ろされた根を縛る、何も無い空間から現れた無数の鎖から目が離せなかった。

「ヒロキ！」

「ん？」

「美由希は私が守るから、行っ てきて！」

「……………わかった。すぐに戻る！」

その言葉に逡巡するヒロキ。しかし、笑顔のリーチェを見て頷き、高く跳躍して根に乗り、走り出した。

「さあ、来なさい？ ……まあ、束で来ようと無駄なんだけどね」

リーチェは魔力による鎖を生成し、婉然と微笑み誰ともなく告げた。

走る、奔る、疾る——！

ヒロキは足場となる根を気を纏わせた刀で斬り裂きながら、目に映る他の根に向かい掌を向け、気弾を飛ばして撃ち落とす。

時折後ろを桜色の光が通り抜けるが、急ぐ彼に気にしている余裕は無い。

「……………！あれか！」

走り続けて、漸く見つけた発生源。

一際大きく踏み込んで跳び上がり、腰溜めに両手を構え、叫ぶ。

「かああああ……めええええ……はああああ……めええええ……
…ッ!」

使うのは気ではなく、魔力。

ここまで魔力を使わず来たのは、自身のリンカーコアにある魔力を全力でブチ込む為。魔力の少ないヒロキが封印するには、これしか方法が無いからだ。

水色の魔力が構えた両の掌に集まり、輝く。

正に全力全開の魔力を、撃ち出さんと両手を突き出し――

「波……うばああああああああっ!」

――背後からの桜色の砲撃魔法に撃ち抜かれた。

砲撃魔法はそのまま彼を巻き込み発生源に直撃。叩き込まれた魔力によって暴走は止まり、木は消える。

吹き飛びつつも体勢を立て直そうと枝に降り立とうとしたヒロキは、木が消えた事によって足を空振りさせて墜落、地面に叩きつけられる。

「あべしっ!？」と妙な呻き声を上げ、ゴロゴロとのたうちまわる。しかし、まだ不幸は終わらなかった。

一息ついたヒロキは見た——自身に向かって落下するトラックの姿を。

「……………つてえ!？ちよ、待て待て待てエ!のおおおおおおっ!!!？」

——プチッ!

「色んな人に……………迷惑かけちゃったね……………」

時は流れ、黄昏が街を照らす。
街の傷痕を見て、なのはは小さく呟いた。

「な、何言ってるんだ!なのははちゃんとやってるよ!」

ユーノの励ましにも、表情は晴れない。
ただ目を伏せ、俯いていた。

「私、気付いてたんだ……あの子が持つてるの。でも、気のせいだって思っちゃった……………」

懺悔するように告白し、その場に座り込むのは。その姿に、見兼ねたユーノが声を上げる。

「なのは……お願い、悲しい顔をしないで！
元々は、僕が原因で……なのははそれを手伝ってくれてるだけなんだから！」

無言。自分の言葉が彼女に届いてるかどうかユーノには分からない。
い。

それでも、ユーノは言葉を止めなかった。

「なのは！なのははちゃんとやってくれてる！」

しかし、それでも……………なのははユーノの言葉に応えなかった。

帰り道。ユーノを肩に乗せ、なのはは帰路を歩く
ひび割れた道路を歩く彼女は、一つの姿を見た。

マネージャーの少女に肩を貸してもらい、ゆっくりと歩くキーパーの少年。痛みはあれど、少女を心配させるような弱音は吐かず、ただ歩く。

その姿に、もう一度顔を伏せるなのは。しかし、すぐに顔を上げ、しっかりと前を見据えて歩き出した。

その目には、決して折れる事のない意志を宿らせて――

この日、高町なのはは決意する。

自分なりの精一杯ではなく、自身の持てる本当の全力で立ち向かう事を。

ユーノの手伝いではなく、自分の意思で集めると。

――もう絶対、繰り返さない為に。

木ってぶつかると案外痛いよね？（後書き）

ヒロキはきつと、魔法で原作キャラに勝負を挑んだら悉く負けますw
潰されちゃった彼ですが、死んではいませんよ？あの後リーチエと合流して、美由希の今回の事に関しての記憶を消して、一先ず帰りました

美由希のキャラが掴めない……やっぱり恭也兄さんの方が良かったかな？思ったりするスモークです

やっと出たドラゴンボール要素“気”！……って言ってもただ飛ばしただけです

この世界での出番は、後は舞空術くらいしかないですが

精神エネルギーである魔力を用いて封印するジュエルシードに対し、生命エネルギーである気を使っただって意味は無いでしょうね
魔力版かめはめ波の威力は、スバルのデイベインバスターくらいと考えています。一応全力ですから、これくらいは……

御指摘、御感想お待ちしております！

確認のち、仕事。時々邪魔者（前書き）

書けたぜヒャッホー！……時間かかりまくりですね、すみません

確認のち、仕事。時々邪魔者

「ふっ！……せあっ！でえいっ！」

あの巨大な木の騒動から数日経ったある日の朝。

ヒロキは自宅から離れ、海鳴市にあったとある山にて拳を振るっていた。

——あれから本当に大変だった、とヒロキは思う。

あの時はゴロゴロ転がって何とかトラックに潰されずに済んだ。しかし転がったおかげで割れた地面にダイブ、そして体が丁度良くフィット。

「抜けねー！」と叫びながらも身を擦って抜けようとするも、やっぱり抜けない。着ていた服はボロボロに変わっていく。

仕方ないから気を軽く嘖き出し、周りの地面を破壊して抜け出て気づく。

——やべ、リーチェ怒ってるわ。

それからヒロキは全速力で走った。風を超え、音を超えたかもしれない。

その途中、ボロボロだった上着が風圧に耐え切れず弾け飛んだ。そりゃもう世紀末の救世主の如くユーはシヨック！

公園に帰ってみれば……なんか抱き着かれて泣かれました。

「心配してくれたんだな」と思い、宥めようとしたヒロキ。

しかし……何だか体が圧迫される感覚がする。

……そして、気付いた。

——抱き着かれたと思ったら、ベアハグでした、まる

ミシミシと悲鳴を上げる体、情けない悲鳴を上げる自分の口、胸板に柔らかな感触。

天国と地獄を共に体験しているヒロキは、悲鳴と共に吐き出された酸素を手でかき集める。結局は無意味だったが。

「心配したんだからー！」と言うリーチェだが、目を開けて俺を見ると言いたかった。回想だから過去進行形？だが、心配したヤツが自分の手によって死にかけているんだぞ？

「ハッ！……だりゃあっ！！」

上段への蹴りから跳び上がり、更に回し蹴りで動きを繋げ、踵落として同時に着地する。そして踏み込み前進し、拳の連打を放つ。

……ちよつとだけ恨みを込めてもバチは当たらないはずだよな？
と思いながら。

ちなみに美由希は事件の記憶を消して帰した、とリーチェは言っていた。

説明する手間は省けたが、ちよつと後ろめたい気分はある。

仕事に関する事は守秘義務があるからダメだが、いずれ自分達の事を話したい。

それと、あの時自分に砲撃魔法を食らわせた魔導師。地面に落ちる前に少しだけ見えた、白の少女と肩に乗ったフェレット。

子供だから殴りはしないが、デコピンくらいなら……いいかな？

「——はあっ!!」

最後に強く、突きを打つ。それから少し深呼吸して息を整えたヒロキは、軽い柔軟運動をして朝の修行を終えた。

「次はリーチェに頼んで重力魔法で負荷掛けて修行するか」、と次のプランを立てつつタオルで汗を拭き、傍に置いていた刀を背負い歩き出そうとして——立ち止まった。

「……………何してんだ、あれは？」

思わず呟いたヒロキの目の前に、地面に顔をつけて何かを探す紫色の猿っぽい悪魔——『ムシラ』が居た。

まるでトリュフを探す豚のように、鼻?を鳴らして動き回っている。ヒロキという存在に気付く気配はない。

それをじつと見ていたヒロキ。そして一体何を思ったのか、

「…………ふっ!」

「ギイツ!?!」

気弾一発。見事頭部に直撃したムシラはもんどり打って地面に叩きつけられた。

ヒロキは気弾を放った掌を見つめながら、握ったり開いたりを繰り返している。

叩きつけられたムシラは、いきなりの攻撃に戸惑いつつも雄叫びを上げた。

その声に反応し、辺りを同じように探していたであろうムシラ達が続々と集まってくる。

その光景にヒロキも掌から視線を外し、ムシラの群れを眺めて思わず溜息を吐く。

ちよっかい掛けたのは自分だが、意外に数が多いので面倒臭い。

「まあ、丁度試したい事もあるし……的は多い方がいいからな……」

とりあえずポジティブに考え、気を取り直す事に。

今回は刀は手に持たず、背負ったまま深く腰を落とし構える。

——そして、構えたと同時にヒロキの体から魔力とは違う、青白い炎のようなオーラが取り巻いた。

その姿にムシラ達がたじろいた瞬間——ヒロキが“消えた”。

辺りを見回すムシラ達。しかし彼の姿は無い。

一匹がふと頭上を見上げたその時——振り下ろされた拳に、そのまま潰された。

轟音と共に拳は地面を砕き、衝撃によって周りのムシラ達が宙に浮く。

「――セアッ！」

気合を声にし、に目の前のムシラを拳の突きで胴体をブチ抜く。更に右へ掌抵を放ち同様に胴体を、左へ肘打ちで頭部を打ち抜き、最後に回し蹴りで背後を文字通り“一蹴”した。

断末魔の悲鳴すら許されず消えた群れの一角。しかしムシラ達は消えた仲間など眼中に無く、次々に襲い掛かる。

「薄情だねエ……………泣けるぜ、まったくよ！」

言葉の割には白々しい笑顔で、ヒロキは気弾を放った。その数は六つ。過たず襲い掛かる一団の一部へと直撃する…………が、撃ち落としたも消滅はせず、また同じように飛び掛かる。

「…………チッ！またか、くそつたれ！」

悪態をつきながら爪の一撃を屈んで躲す。そこから一匹の足を鷲掴み、正にフレイルの如く振り回した。

掴んだムシラの頭部が周囲の同族達を打ち据え、吹き飛ばす。最終的にはヒロキ自身も回転。手にしたムシラをハンマー投げのようにブン投げた。

「っしやあああああああああ！！！」

空の彼方でキラリと輝く哀れなムシラ、晴れやかな顔で叫ぶヒロキ。はつきり言ってコイツうるさい。

辺りを見回すと、もうムシラの姿は無い。どうやらぐるぐる回っている内に、全て叩きのめしていたらしい……ついでにへし折れている木も散見される。

「やべ、やり過ぎたか……………ん？」

マナーモードにしていた携帯電話が震えているのに気付く。どうやら電話らしい。

携帯電話を開き、ディスプレイに映し出された名前は『リーチェ・アウラード』

ニュータイプのようにプレッシャーを携帯電話よりビシビシ感じながらも、ヒロキは通話ボタンを押した。

「……………もしもし？」

『ヒロキイイイ……………ッ！！』

「ぎゃあああああああ！？」

まるで地獄から響いてきたような声に、悲鳴を上げて咄嗟に耳か

ら携帯電話を離す。

『今日の朝ご飯当番、ヒロキだよねえ……？どうしたのかなあ……？』

時折「シュゴー、シュゴー」という暗黒面の帝王のような呼吸音が聞こえてくる。

……どうやら相棒は人外になってしまった（老けていない時点で人外だが）らしい。

『早く帰ってきて作らないと、また「申し訳ございません、お嬢様！すぐに帰ります！」……うん、よろしい』

『3分で帰ってきてね』と、幾分機嫌を直したのか明るい声で通話が切られる……え、3分？

「……………」

冷や汗ダラダラ。とりあえず額に指を当て、リーチェの気が魔力を探ってみる。

……………10秒経過。

「……………アイツ、どちらも抑えてやがるな!？」

今から走って帰ったとして、到底3分で帰る事は不可能な場所に自宅はある。

しかし、遅れたら――思い出したくない記憶が甦った。顔は青ざめ体は震える。冷や汗は止まらない。

「……………こうなったら！」

とりあえず気を一定量、全身から放出させて空に舞い上がる。『舞空術』と呼ばれる技法だ。

山を見下ろせる程の高さまで上がり、周りを見渡して飛行機等の姿が無いことを確認して、

「……………だあらっしゃあああああつー！！」

……………彼は今日、光を超えた。

「今日の俺の運勢は悪いのか……………？」

「何ブツブツ言ってるんだい！？」

晴れた空を覆い尽くさんばかりの森の中に、噛み付かんばかりの

勢いの前方の女。

何故こうなったか……とりあえず思い出していこう。

「（まず、修行の後に急いで帰って朝メシを作ったんだっとな。それから午前はとりあえずリーチエと一緒に探索して、成果はナシ。

昼メシ食いに翠屋行って、確か美由希がちょうど休憩中だったから一緒に食ったんだっけ……メシも美味かったな、翠屋。

それから別れて、また探しに回って……魔力の反応がしたから、反応した場所に向かったんだ。『月村』っていう屋敷の私有地だったっけか？

そしたら結界魔法が張ってあって、バレないように解析して、中に入ったら……なんかでつかい猫が居たな。ありや驚いたわ。

ジュエルシードの暴走だろうから、仕事しようとしたら……）」

「よそ見なんて、随分余裕だね！」

「……コイツが居たんだよなあ」

声と共に繰り出された女の右フック。それを頭を下げた膝が顔面へと迫る。

それを掌抵で相殺して頭を上げると、

「せやあつー！」

「っー！」

次は側頭部へのハイキック。ヒロキは腕を盾にする事で防いだ。防がれた事に多少驚く女。しかしすぐに好戦的な笑みを浮かべ、

「まだまだッ！」

「……面倒臭エな、もう！」

右ストレートを掴み取り、適当な方向へとブン投げた。しかし、女は一回転して受け身を取り、軽々と地に降り立つ。

「随分焦ってるみたいだねえ……そんなに先に行かせたあの女が、そんなに心配かい？」

「じゃあ退いてくれるってーのか？」

「そんなワケないだろ？」

アタシのご主人様……フェイトの邪魔はさせないよ！」

「だよなあ……」

そう目の前の女……名前はアルフというらしいが、コイツを引き止める役目をヒロキが引き受け、リーチエに回収に行かせた。

だが、ジュエルシードの方にもアルフの主人『フェイト』が居るらしい。

「《リーチエ……リーチエ!》」

「《ん、なにー?》」

『念話』と呼ばれるテレパシーのような魔法を使い、リーチエに連絡を取る。

いつも通りの返事に少し安堵するも、まだ確認していない事がある。

「《ジュエルシードは手に入れたか?》」

「《まだだよ……今、金髪の女の子が持つてる。》

もう一人、白い女の子とフェレット……じゃない、ユーノ・スクライア君が居るんだけど》」

「《……さっきの魔力のぶつかりはその二人か》」

白い女の子……近くにユーノ・スクライアが居る事から、その子はユーノの協力者なのだろう。

そして、もう一人の金髪の女の子……間違いなく、アルフの言う『フェイト』だろう。

「《援護はいるか?……大丈夫なのか?》」

「《大丈夫だよ、捕獲だったら出来るから! ヒロキも油断しないで

よ?」

「《ハッ!……言ってくれるぜ》」

リーチエの意志を確認し、念話を切る。
律儀にも待ってくれていたアルフに少し感謝の念を込めながら、

「さあて、やろうか……」

「やっとかい?待ちくたびれたよ」

呆れたような声に苦笑しつつ、ヒロキは構える。
同時にアルフも構えて――

――二人の拳がぶつかり合った。

一方その頃リーチエは、

「それ……渡してはくれないかな?」

「……欲しければ、奪い取ってください」

もう何度目になるかわからない問答を繰り返していた。

溜息を吐き、困ったような顔をして笑うリーチェと、無表情でリーチェを見つめる金髪の少女『フェイト』。

「（それにしても、あの子の瞳……久しぶりに見るわね。
昔の私達と同じ……）」

そのどこか寂しげな瞳に郷愁を覚えながらも、リーチェはきつく目を細める。

その瞳に映るは敵意。そして――

「とりあえず……仕事でもあるし、私にとってそれは大切な手掛かりかもしれない」

――願いを掴み取らんとする意志。
いくら懐かしく思えても、今は関係無いと考えた。

突如雰囲気を変貌したリーチェに、フェイトも咄嗟に身構える。
紅の魔力が炎の様にゆらめき、発せられる威圧感に大気が震えだす。

「だから、貴女みたいな子供でも……私の意志、貫かせてもらっわ」

誰もが見惚れてしまうような不敵な笑みを浮かべ、リーチェ・ア

ウラードは宙へと舞い上がった。

確認のち、仕事。時々邪魔者（後書き）

ちょっと伏線っぽいのを張ってみました

……伏線だと思っているのは、私だけかもしれませんけどね

次回はもっと早く上げたいなあ……

御感想、御指摘等お待ちしております！

真面目なバトルと不真面目？なバトル（前書き）

戦闘描写、難しいなあ……

それでは、物語へどうぞ！

真面目なバトルと不真面目？なバトル

「バルディッシュ！」

《Yes, sir. Scythe form》

先に動いたのは、フェイト・テストロッサ。
フェイトのもつデバイス『バルディッシュ』は、主の言葉を受けて姿を変える。

ヘッド部分を直角に展開させ、そこから彼女の持つ金色の魔力が圧縮されて刃として現れた。

その姿は正しく――

「――可愛い死神ちゃんね」

「……………っ」

そんな感想をリーチエは思わず零してしまう。

その言葉にフェイトはうつすらと頬を紅潮させながらも、

「『フォトンランサー』……ファイア！」

飛来する12の金の光弾。電光を纏ったその弾丸は寸分違わずリーチエを狙う。

リーチェは動かず、向かってくる光弾に手を翳し、

「……『ヴァッサーシルト』」

静かに呟いた言葉が引き金となり、二人の間に紅の突風が吹き荒れた。

魔力によって引き起こされた風に光弾は進路を変えられ、木を貫き消える。

「『グラップルバインド』！」

何も無い空間より突如現れた四つの巨大な掌が、フェイトを捕えんと突き進む。

前後左右。捕らえるというより最早押し潰すような勢いで迫る掌を前にフェイトは動かず——掌は互いにぶつかり合った。

「ハア……………これで終わり。なら良かったんだけどなあ……………」

リーチェは溜息混じりに呟くと同時に背後を見ずに手を翳し、

「『プロテクション』、展開」

魔力で生み出された障壁が背後に現れると同時に、まるで吸い込まれるかのように鎌の一撃が衝突した。

「……ッ!？」

「ふうっ……危ない危ない」

虚を突いた攻撃を防がれるとは思わなかったのか、驚き目を見開くフェイト。しかし、両側から迫ってくる魔力に気付き、咄嗟に感情を沈めてその場から飛び退る。
するとフェイトが居た場所に、またもや二つのグラップルバインドがぶつかり合った。

眼前のその光景から、フェイトは視線を艶然と微笑むリーチエに向ける。

「そのスピード……それが貴女の長所なんだね」

そう、フェイトが得意とするのは機動力を生かした中々近距離戦。グラップルバインドを回避したのは、恐らく高速機動を可能とする魔法。

更に先程のフォトンランサー、数にしては統率が取れていた。

そこからフェイトは近接のみではなく、射撃も得意だとリーチエは考える。

「（……才能もあるし、今の実力に至るまで相応の努力もしてきたみたいだね。」

ちよつと厄介かなあ……………あの子みたいなのって絶対諦めないタイプだし……………」

「……………行きます」

「宣言してから来るなんて……………優しいのね！」

どうしようか考えつつ、リーチェは魔力を両手に集めて構えた。

次にフェイトはその場で一回転して遠心力を利用し……………バルディッシュを振り回す！

「『ハーケンセイバー』ッ！」

《H a k e n S a b e r》

その言葉と共に、バルディッシュの先端に生み出されていた圧縮された魔力が刃となり、回転を続けながらリーチェへと向かっていった。

ぐるぐるぐるぐる、変則的な動きで迫る魔力刃。右に避けても左に避けても向かってくる……………どうやら追尾機能もあるようだ。

仕方ないから手を突き出し、プロテクションを展開。すると……………

「……………わぁーお、嘘でしょ？」

ガリガリ噛まれて削られていくプロテクションにリーチエは思わず言葉を零す。

阻まれているのだから、止まるか勢いが弱まっても良いはずなのに、何故かそのまま防御を削っていく魔力刃。さらに――

「はぁっ！」

《Scythe Slash》

「!？」

鉄をも容易く斬り裂く鎌の斬撃が背後から襲ってきた。初撃は首を前に倒して躲すも、二撃目は胴体を狙ってきたので、もう片方の手を突き出しプロテクションを展開して防ぐ。

「……………もう、おイタが過ぎるよ？」

「うぁ!？」

両手のプロテクションに意図的に魔力を流し込み、爆破させる。

『バリアバースト』と呼ばれる魔法によって魔力刃は霧散し、フエイトも吹き飛ばされた……が、すぐに体勢を立て直した。

——そして流れる静寂。

どちらも動かず、二人は互いに見つめ合う……
未だ消えないリーチェの笑みは、余裕の表れか。
冷静な表情の下で静かに闘志を燃やすフェイト。

そして、風に吹かれた木の葉が地に落ち、音を立てた瞬間——

——金の光刃と紅の盾が、再度ぶつかり合った。

「逃げてばっかじゃ意味ないよっ！」

「昔にも似たような事を言われたぜ、これが!？」

こちらは仲良く追いかけてこの最中。

「引き止めが目的なら、逃げ回ればいいじゃない」との考えから
始まり、最初の拳のぶつかり合いから一転して逃げ出したヒロキ。
スタコラサッサと逃げ回るヒロキを狼形態で追うアルフ。さながら
ネズミを追いかける猫の如く、ト。とジェ。ーだ。

「犬って案外スタミナあんのな！」

「アタシは犬じゃなくて狼だーっ！」

「狼はイヌ科の動物なんだよ、バーカ！」

「……………ッッッ!!?」

バタバタと走りながら言い合う二人。

だが、ヒロキの言い放った最後の言葉にアルフは足を止めた。
いきなり足が止まった事にヒロキも足を止め、振り向くと――

――なんか凄い落ち込んでるアルフが居た。

人間形態に戻り、陰を背負いうずくまっている。

「あのー…………アルフさん？」

「……………ぐすっ」

「のおおおおおおー…………!!?」

頭抱えて叫ぶヒロキ。やべえ、泣かせた…………？
恐る恐る近づいてみると、嚙り泣きが聞こえる…………とりあえず声
を掛けようと、ヒロキは口を開いた。

「え、おーい…………」

「アタシはっ…………犬じゃないもん……………狼だもん……………っ!」

「はあ……………はぐおあっ?!」

泣きじゃくるアルフ。先程の気の強さが嘘のようだが……………やった事はえげつない事極まりなかった。

泣きながらのアップercutが、ヒロキの顎にクリティカルヒット！

浮かび上がったところで胴体にフック！アップー！！ストレート……………！！！！

吹き飛んだら捕縛魔法『チェーンバインド』で引き寄せて更に殴る、殴る、殴る……………！！

「アタシは狼だあああああああつ！」

「ちょっ、ぐへっ、うがつ……………！」

涙は止まり、怒りの絶叫へと変わる。攻撃も拳だけに止まらず、蹴りやら頭突きやら加わってだんだんと凶悪になっていく。

そして最後に、大きく足を振り上げて……………

「犬じゃ……………なああああああいつ……………！」

「ひでぶっ……………！」

……………横つ面を大きく蹴り飛ばした。

錐揉み回転して、木々を薙ぎ倒しながら吹き飛ばすヒロキ。気分はサッカーボールだ。

「うおお……ロン中切れた、地味に痛エ……！
………しかしなんつか、理不尽じゃねエかな？」

10本の木々を倒して漸く止まったヒロキは、口内の血を唾と共に吐き出しつつぼやく。

魔導師が着ける法衣『バリアジャケット』があればもう少し軽減出来ただろうが、生憎ヒロキはデバイスを持っていない。

とりあえずは体中に付いた枝葉を払い落とし、首と肩をぐるぐる回してアルフを見ると、

「はあっ！」

「ん？………あらら、捕まっちゃった」

左手首が、またチェーンバインドに巻き付かれていた。

バインド等の捕縛魔法を抜けるには、その魔法の術式を解析して解放する為の処理を施し、適度な強度まで下がったら魔力を込めて破壊するという方法がある。

………しかし、解析を補助するデバイスも無く、そもそもそういう技術が皆無なヒロキにそんな芸当が出来るはずも無い。

だからヒロキは、

「ふんっ！」

とりあえず引っ搦んで力任せにブチツと千切った。
驚き動きを止めたアルフに好機と見たヒロキ。そして——消えた
正確にはただ速く動いただけだが、アルフの目には消えた様に映
る。

「ど、どこだい!？」

「ここだぜ……ッ！」

背後から聞こえてきた声に振り向くと——両手を胸の前で指先
を合わせて構え、浮かび上がっているヒロキの姿があつた。
それは、あの大樹の事件で放った『かめはめ波』とは違う技。
威力もまた、かめはめ波より高く強力。

その技の名は——

「——『激烈光弾』ッ!！」

「くっ……………!！」

放たれた巨大な水色の光弾。その勢いは正に“激烈”。
アルフは咄嗟にシールドを張るも、瞬く間に呑み込まれてしまっ
た。

……ここで一つ思い出してほしい。

気による攻撃は総じて青白い色か金色（紫もあるが）、ヒロキの魔力光は先の事件から解るように水色だ。

そしてヒロキの魔力量は一般の魔導師よりも低く、魔力運用等の技能も殆ど無いに等しい。

これが高町なのはやフェイト・テストロッサならば本当に威力も上がり、アルフのシールドを貫いていただろう。

しかし、全力の魔力でかめはめ波一発の再現が精一杯のヒロキがその威力を上回る激烈光弾を放つとなると――

「……………アンタ、大丈夫かい？」

「げほっこほっ……………ダイジョバない……………」

——このように防御を抜けず、ただ疲れるだけの徒労となってしまうた。

敵にさえ心配されるこの体たらく。

図らずも足止めにはなっているが、本当にこれで良いのだろうか……………？

二つの戦いから少し離れた森の中、突如地面に魔法陣が現れる。それはミッド式の陣でも、『ベル力式』と呼ばれるもう一つの魔法導体系の陣でもない。

リーチエのとは違う、血のような紅の魔法陣。そこから濃密な魔力が噴き出し、同時にナイフとショットガンを持った人型の“何か”が現れた。

その“何か”は一つに限らず、二つ、三つ……と、更に数を増していく。

始めに出てきた“何か”——『マリオネット』は、辺りをぐるりと見渡し、リーチエとフェイトが戦う場へと向かう。

それに従うように、同じく出てきたマリオネット達は得物をギラつかせ、ゆっくりと歩き出した。

——勝負の終わりは近い。

真面目なバトルと不真面目？なバトル（後書き）

……………どうしてこうなった？（マテ

ヒロキも今回、真面目に戦わせようと考えていたんですが……………思い付くまま書いていたらこんな事になってしまいましたw

リーチエは設定に補助系メインと書いていたので、戦闘描写があまり思い付かずズルズルと……………精進あるのみ、ですね

御指摘、御感想等お待ちしております！

暴走リーチェちゃんとブチ切れヒロキ君（前書き）

今回からちょっとオリジナル展開が入ってきます。

それでは、物語をどうぞ！

暴走リーチちゃんとブチ切れヒロキ君

始めに異常に気付いたのは、高町なのはの傍に寄り添い、リーチエとフェイトの戦いを見守っていたユーノ・スクライアだった。

「（結界内への転移……いや、これは“召喚”？
だけど、この魔力は……！？）」

彼の知る魔法にも、召喚魔法の術式は存在する。
だが今しがた感じた魔力はあまりにも禍々しく、術式も捻曲げられ歪みきっている……彼にとって初めての感覚であり、全身が粟立つのを感じた。

「（とにかく、伝えないと！）
リーチエさん！戦闘を中断してくだ——うわあああ！？」

自分達の代わりに戦ってくれている（仕事なのだが）彼女に呼びかけようとした瞬間——金の光弾が彼の真横にブチ込まれた。

犯人はフェイト……なワケも無く、リーチエ。

牽制で撃たれたフォトンランサーを引っ掴み、呼びかけたユーノへとブン投げたのだ。

しかもご丁寧な事に掴んだ際に更に魔力を注入して強化したらしい。ユーノの真横には惨たらしいくらいに陥没した地面が見て取れる。

——言外に“わかっているから黙っている”という事らしい…
…大人げねーヤツである。

だったら念話で返事をしてくれてもいいじゃないか。そんな事を
思いつつ、

「（とりあえず……………なのはだけでも守ろう）」

なのはを中心に、小さな防護結界を展開する。
さっさと切り替えたユーノ少年、中々に逞しい9歳の姿だった。

「！今の魔力は…………？」

「……………あー、落ち着いてきた」

ユーノ同様、魔力を感じたアルフ。魔力枯渇の息切れから復活し
たヒロキ。

耳と鼻をヒクヒク動かして辺りを探る彼女を尻目に彼もまた膝を
上げて立ち上がり、

「なあ、提案があるんだが——うわっと!？」

話し掛けたら殴り掛けられた。右手で受け止めるも、また拳が飛んでくる。

弾き、受け止め、流しながら口を開こうとすると今度は蹴りが飛んできた。

流石にイラついたのか、ヒロキはこめかみをヒクつかせながらも蹴りを肘で受け止める。

……人の肘の骨は非常に硬く、拳に比べさほど鍛練も必要なく打撃としても優れた部分である。

対する脛は、脛骨のすぐ上に神経が通っている為にアキレス腱同様、人体の急所の一つとして数えられている。

と、まあそんな二つがぶつかり合うと――

「いだあああつ!？」

――まあ、こうなるワケである。

『メキヨツ』と嫌な音を立てた脛を押さえてのたうちまわれるアルフ。その姿を青筋立てながら見下ろすヒロキ。

涙で歪んだ視界で見上げると、冷たい碧の瞳で見下ろすヒロキの姿が――あれ？

乱暴に涙を拭い、もう一度見上げると――変わらず黒目の彼が立っていた。

またヒロキが口を開こうとすると、何故か喉を鳴らして威嚇しだすアルフ。

そんな対応に溜息を吐きつつも、頭をガリガリ搔いて、

「あのな……お前も感じたと思うけど妙なヤツ等が現れただろ？俺は『一時休戦して、さつさとリーチエ達の方へ向かおうぜ』って提案しようとしたんだが？

話くらい聞いてくれたって良くねーか？」

「……………気付いたんだよ。アンタは“アイツ等”と同じ匂いがする！」

そんなヤツを、フェイトに合わせるワケにはいかないんだ！」

「はぁ？……いや、誰だよ？」

予想外の拒絶の理由に面食らうも、とりあえずは問い返す。

理由も解さず一方的に拒絶されるのは、彼としても頂けなかったからだ。

……………相手が美人だから、というのものもあるかもしれないが。

「アイツ等は……って、そудだよ！変なヤツ等が出たんだ、フェイトが危ない！」

「今更かよ！？つーか最後まで言っけてのエセ狼！」

脛の痛みもなんのその。猛スピードで走り去ったアルフに悪態をつきながら、ヒロキも同様に走り出す。

「アイツ等って誰だっつの——ッ!」

そんな叫びが辺りに虚しく響き渡った。

「はあああつ!」

金の閃きが人型の人形の首を薙ぐ。

その隙にショットガンの高速の散弾がフェイトを狙うも、彼女の愛機バルディッシュが詠唱した防御魔法『ディフェンサー』が防ぐ。散弾はディフェンサーを食い破るも既に速度は目に止まる程に遅く、いとも簡単に躲され人形は袈裟掛けに斬り裂かれて崩れ落ちた。

「はあ……はあ……っ!」

リーチエとの戦闘で動き回り、彼女——フェイトは少なからず疲労していた。

突然現れたこの人形——マリオネットは大して強くはない。

だが、集団で来られると厄介な相手だと言える。

強敵が一匹現れるか、雑魚が大量にワラワラと来るか……どちらが楽かは言ってもないだろう。

しかも、絶えず召喚されている様なので余計にタチが悪い。

そんな彼女の視線の端には、

「グラップルバインド改め、マジカルブリンガー！」

グラップルバインドの応用でマリオネットの足を掴み、元氣一杯にブンブン振り回して立ち回るリーチエの姿があった。

ぶつけ合わせて無造作に放り投げ、更に伸ばして掴み取り地面に叩きつける。

叩きつけたら叩きつけたで、今度は野球のピッチャーの如く前方のマリオネットの群れへとブン投げた。しかもジャイロ回転付きという大盤振る舞いだ。

フェイトもまた、空へと上がりフォトンランサーを撃ち込む。

関節部を狙い、怯んだところを一気に斬り倒していく……も、やはり動きは鈍い。

「届け！覚醒イリユージョン！」

リーチエから発せられたと同時にフェイト疲労が消え、魔力も回復した。

いきなりの事にリーチエの方を向くと、ニッコリ笑顔でVサインをフェイトへ向けている。

「（敵なのに………どうして私を助けたの？）」

先程まで戦っていた相手が何故自分を助けるのか、そんな疑問が頭の中を飛び交う。

だが――

「……………ありがとうございます」

――不思議と悪い気分はしなかった
むしろちょっと嬉しい気分だ。

魔力が戻ればこっちのもの。ジャンジャンバリバリとフォトンラッサーを撃ちまくり、高速機動魔法『ソニックムーヴ』を駆使して立ち回る。

リーチェも負けられないとばかりに密集したマリオネットへ呐喊。中心に位置取りヴァッサーシルトにて纏めて空高く巻き上げ、マジカルプリンガーで両側からプレスする。汚物は圧殺らしい。

残ったのは二体。リーチェは木を引っこ抜き投げ付ける体勢を取り、フェイトもバルディッシュを水平に構えて狙いを定める。

恐れという感情が無い筈の悪魔が、避けようの無い危機から逃れようと後ろ退さると、

「フェイトーーーーーッ！」

「轢き殺されてーのかコノヤローめ！」

突然背後から現れた二人（一人と一匹）によって文字通りにブツ飛ばされた

飛んだら飛んだで一体は木の幹によって叩き潰され、一体は胴が泣き別れとなる。

敵だったとしてもあんまりな最期だったので、その光景を見たユイノは軽く同情をした。

「ヒロキ！北西300m！」

「かしこまりました、お嬢様ア！」

リーチエから声が飛ぶ。どうやら魔法陣の位置を闘いの最中に解析していたらしい。

ヒロキは指示された場所へと一気に駆け出した。

地面に描かれた魔法陣から、今度は兜を着けたトカゲのような悪魔『ブレイド』が顔を出す。

魔帝直々に創られた精鋭たるブレイドは、その身に受けた命を果たさんと魔界からこの地球に来た。

――全ては魔帝の御為に。

創造主たる主への忠誠を胸に、魔法陣から飛び出そうとする……
も、何かがおかしい。

どう動いても前に進まない……？自分の後ろにもブレイド達が居る。

さつきから抗議をしてくるのか、爪でチクチク突いてくるので地味に痛い。

そして気付いた。自分の頭が何者かに掴まれ押さえ込まれてる事に――

「残念無念。また来てねん！」

そんなふざけた言葉と視界一杯に広がった拳を最期に、ブレイドの意識は途絶えた――

お分かりの通り、ブレイドを消したのはヒロキだ。

走って見付けて掴んで殴り付けるという実に単純な手順で、魔法陣をブチ壊した。……地面も陥没したが。

どうも最近は踏んだり蹴ったりだったので、バッチリ成功させたことに満足げなヒロキ。晴れやかに笑っている。

さあ、帰ろう。そう思い意気揚々と伸びをして、

「――ぐえっ！！？」

上から降ってきた巨大な何かに下敷きにされた。
彼を下敷きにしたのは、茶色の体毛の悪魔『オレンジエラ』。その姿は早い話がとてつもなくデカいゴリラである。

潰れたカエルのような悲鳴を上げ、地面にめり込む。
キメたと思った途端にコレとは、最早厄日どころの話ではない。

「何なんだよ、もう……！？」
この短期間でよオオオオオオオオオ！！」

愚痴を零したっていいじゃない。つーか叫んだ。
「仏の顔も三度まで」の言葉通り、怒りのボルテージが上がっていく。

……まあ、アルフの事に関しては自業自得であるが。

「くそつたれええええええええええッ！！」

——彼が一際大きく叫んだ瞬間、金の光が天を衝き、結界を碎いた。

その勢いでオレンジエラが吹き飛ばされるも、その足を掴まれ引き止められる。

「……すぐに死ぬると思うなよ？」

引き止めたのは、自分が潰した男。下ろしていた左側の髪までもが逆立ち、垂れていた瞳はギラつき自分を射殺すように捉えていた。声は荒々しく、掴まれた足は千切られるかのようにギチギチと悲鳴を上げる。

「でえいつ！」

言葉と共に、掴んでいた足から地面に叩きつけ、手を放して蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされたオラングエラは両手を使い地面を弾き、体勢を立て直そうとして——その腹部に拳がめり込んだ。

「グエア……………！？」

「ふんっ！だりゃあああっ！」

あまりの痛みと衝撃に、その巨軀がくの字に折れ曲がる。しかし、まだ攻勢は終わらない。

下がった顎を蹴り上げられ、更には軽く跳び上がり後頭部を踵落として蹴り落とされ、またもや地面に叩きつけられる。

勢い良く叩きつけられた衝撃にオラングエラは大きくバウンドし、またもや拳と蹴りの乱打が打ち据えた。

防御すらする事もままならず、サンドバック状態のオラングエラだったが——突如拳が止まった。

顔を上げてみれば、腕をだらりと降ろして佇むヒロキの姿が見える。

「……………来いよ、殴ってみろ」

それは明らかな挑発。投げ掛けられたら誰もが裏があると疑うであろう、安っぽい言葉だ。

——だが、オレンジエラはそれに乗ってやった。

「グカアアアアアアアアッ！！」

その余裕を砕いてやろう、人間——！！

咆哮が辺りの木々を震わせる。

その巨体に似合わぬ俊敏さでヒロキの眼前まで移動し、大きく右の拳を振り上げ、勢い良く殴りつけた。

動かぬヒロキの頬に拳が叩き込まれ、鈍い音が辺りに響く。拳から伝わる確かな手応えに、オレンジエラは口を歪めた。

コンクリートを容易に粉碎するその威力をまともに受けければ無事では済まないだろう。

「そんなパンチじゃ効かねエな……………？」

だが、発せられた言葉は苦悶ではなく嘲りだった。あまりの結果に背筋が凍る。

男は拳を受けながらも笑い、いつの間にか殴りつけた右腕は掴まれ、逃れる事は出来ない。

目の前の男から離れる為にジタバタと暴れ、何度も何度も残った左腕で殴り続ける。

その甲斐あってか、オラングエラは離れる事に成功した。

反撃とばかりに両足をしならせ、飛び掛かろうと標的を見据え——
——気付いた。

——標的の手に、自分の右腕が掴まれたままの事に。

オラングエラが自力で逃れたのではなく、ヒロキが右腕を引き千切ったから逃れる事が出来たのだ。

ようやく気付いたオラングエラに、激痛と喪失感が襲う。

苦悶の悲鳴を上げ、のたうちまわれるオラングエラにヒロキは渴いた唇を舐め、

「安心しろ……………そろそろ終わるさ。」

——「ゼアアアアっ！」

まるでボールのように横っ腹から蹴り上げられ、上空へ舞い上がる。

このまま殺されるわけにはいかない。オラングエラは痛みに耐え、身を捻って体勢を立て直し、音による衝撃波で迎え撃とつと口を開く。

だが、既に地面に彼の姿は無い。首を振り辺りを見回すと、

「だぁぁぁあぁっ！」

風を切るような音と共に現れたヒロキに横っ面を殴り飛ばされた。

殴り飛ばされた先には舞空術にて先回り、身を捻って遠心力が十分に伴った回し蹴りがオラングエラにめり込む。

「グゲアアアッ！」

「死ね……ッ！」

呻くオラングエラに吐き捨て、ヒロキは両手を額に重ねて翳す。
今回は魔力ではなく気で放つ。
アルフの時のような失敗を重ねる気は毛頭ない。結構恥ずかしかったのだから。

今朝のムシラとの戦闘で気付いたが、どうやら撃ち出した瞬間に威力が落ちるらしい。

だったら――

「（目一杯気を込めればいいだけだ……ッ！）
くたばれ……魔閃光オオオオオオッ……！」

「ゲガア……………アア……………ッ！」

両手を突き出し撃ち出された金の閃光はオレンジエラを包み、焼き尽くす。

跡形も残らず消えたオレンジエラ。着地したヒロキは右を見て、左を見て、前後上下を見た後に、

「……………よしっ！」

小さくガッツポーズ。今度こそキメられた事に小さいながらも笑い、リーチ達の方へと向けた走り出した。

——数秒後、自分で空けた穴に躓き顔から地面へダイブしたヒロキの姿があった。

「……………まあ、最近色々あったからね……………」

「い、今の……………誰？なに？」

「さ、さあ……………？」

まるで同情するように呟くリーチと、響いた叫びに若干怖がるフェイト達。

ユーノは結界が破壊された事に慌てていて、高町なのは眠ったままだ。

「どうやって收拾つけようか？とリーチェは考えた………思いついた。」

「……………あ、行ってもいいから。」

「気をつけて帰るんだよ？」

「ハアアア！？」

いきなりとんでもない事を吐かしやがった。戦闘開始時の気迫はどこへやら、ヘラツと笑って手を振っている。

「リ、リーチェさん！？一体何を《いいから黙ってて！》……………」

抗議の声を上げるユーノに念話でストップをかけた。

まだ言いたい事はあったが、ユーノは大人しく口を閉じる。どうやら考えがあるらしい。

「どーせまた会ったし……………何時でも取り返せるし、ね。ほら、さっさと行った行った！」

犬を向こうへ追いやるかのような手振りは、どうにもわざとらし

い。

訝しげに見るフェイトとアルフの視線に若干冷や汗が出る。ユーノはジト目だ。

自分は嘘をつけないタイプだと自覚した瞬間だった。

次第にフェイト達の視線もユーノ同様に変わっていき、顔を引き攣らせたリーチェ。——その時、天啓が彼女に降る！

「……………私のこの手が光って唸るうううう！！」

「「にやああああああああ！！？」」

「ブン投げたアアアアアアア！！？」

そう、マジカルプリンガーで掴んで投げやがった。

あまりの理不尽にユーノのシャウトが森全体に響き渡る。言うことを聞かないのならは実力行使ということらしい。とにかくユーノはリーチェへと走り寄り、

「一体どういう事ですか！？始まった時にあんなだけ見栄切っておきながら、最後に逃がすって！

というかあの二人、大丈夫なんですか！？」

「うん、それはそうなんだけどね……………どうせあの子、これからもジエルシード集めに現れるでしょ？」

だったらいつそのこと、私達とあの子達で全部集まった頃に奪っちゃえばいいなーって思ったのよ。

最後は大丈夫よ。……5割は」

「全然大丈夫じゃない!？」

「覚醒イリユージョンも使った事だしね」とユーノに笑いかける。
コイツ、スルーしやがった。

リーチエに若干呆れながらも、一つの疑問が浮かんだ。
その魔法はブースト魔法ではなかったのか？

「ブースト魔法……とは少し違うかな？
あの魔法は一種の興奮状態にさせて、一時的に疲労等を忘れさせる効果なの。

ぶっちゃけて言うと無理矢理ランナーズハイにさせる効果だよ」

「……じゃああの子は………」

「間違いなく筋肉痛確定ね。

あの子の奪うってさっき言ったけど、やっぱり多くはこっちが手にしていた方がいいでしょ？」

地味な嫌がらせである。ユーノはちょっと襲撃者であるフェイトに同情した。

イリユージョン
「だから覚醒錯覚よ」、とドヤ顔で言い張るリーチエ。どう返そうか迷ったが、とりあえずスルーした。
序盤のささやかな仕返しである。

そんな反応に若干落ち込みながらも、なのはへと視線を向け、こ

れからどうするか思案する。

ユーノに話してはいないが、さつきからこちらへ向かう誰かを感じてる。一人はヒロキ、もう一人はわからないが中々に速い。

そして、現れたのは――

「……………フェイト、大丈夫かい？」

「うん、うん……………」

日は沈み、月が街を照らす

遠見市のとあるマンションの一室。言ってみればフェイト達の拠点となる場所だ。

投げ飛ばされた二人は海へと突っ込み、ズブ濡れになりながらも帰路に着く。辿り着き、帰宅したらしたで魔法の効果が続いたフェイト。ボタンと倒れてアルフにベッドまで運ばれた。

「一体どうしたんだい？フェイトが筋肉痛なんて……………」

「わからないよ……………うう、なんでかなあ……………？」

ちよっぴり涙目なフェイト。原因はリーチエにあるのだが、彼女にはわからないようだ……………純粹なのか、バカ正直なのか。

「フン、情けないな……？」

「ジュエルシールドを手に入れたのは褒めてやるが」

「結局人形はその程度って事よ」

部屋に響いた男女の声の方向に、二人は首を向ける。

男は特徴的な肩当ての付いた黒いボディースーツを着込み、露出した浅黒い肌の腕や足は筋骨隆々でかなり鍛え上げられている事が伺える。

女の服装は男同様にボディースーツを着込み、しなやかながらも力強さを持つ肢体が見る者の目を奪う。

二人の左目には片眼鏡のような機械が装着され、その双眸は自信に満ち溢れている。

そして——腰には尻尾が巻き付けられていたあった。

「ターレス”、”ギーネ”……！？
帰ってきてたのかい！？」

「随分な物言いだな……俺達は仲間だろう？」

「……………アタシは嫌だよ、ターレス……………」

睨みつけるアルフを飄々と流し、笑うターレスと呼ばれた男。
ギーネと呼ばれた女は本当に嫌そうに顔を歪める。

「……………人形ってどういう事？」

「……………いずれ知るだろうさ。」

それとギーネ……………貴様、口が過ぎるぞ？」

「う、ゴメンよ……………」

フェイトの疑問を濁すように答え、鋭い目つきでギーネを咎める。
素直に謝るギーネは、少しばかり落ち込んだように俯いた。

「……………ギーネ、次回からお前も着いて行け」

「「はあ！？」」

アルフとギーネ、二人の声が重なる。重なったら重なったで互いに顔を見合わせ、同時にそっぽを向いた。
どうやら、二人の仲は険悪らしい。

「大体、何でアタシが……………！」

「お前だからだ。……………俺は少し呼ばれているのでな」

「……………わかったよ。ターレスが言うんならそうする。
感謝しなよ、駄犬に人形」

「ハッ！誰が感謝なんかするか！」

「……………私はフェイトだよ。
でも……………ありがとね、ギーネ」

噛み付くアルフに、礼を言うフェイト。
あまりにも素直なフェイトに、ギーネは少し憎々しげに顔を歪める。

二人の知らぬ所で、新たな敵が増えた瞬間だった――

暴走リーチェちゃんとブチ切れヒロキ君（後書き）

はい、オリキャラのギーネとドラゴンボールより黒レタスことターレスの登場です。

サイヤ人ですので、ギーネの名前の由来はネギのアナグラム。うわあ、安直w

しかし、ターレスの喋り方ってこんな感じだったかなあ……？また映画のDVD借りて見ないと（汗

ヒロキがアルフの攻撃はダメージを受け、オラングエラの攻撃にあまりダメージを受けないのにはちよつとした理由があります。

しかし、やっと主人公らしく戦えたなあ……（オイ

リーチェのマジカルブリンガーに関しては、ネロのデビルブリンガーをイメージしてください。

御指摘、御感想お待ちしております！

修行風景と温泉へのお誘い（前書き）

短い上に進まない……んでもって遅い！

今回はタイトル通り、後DMCキャラが出てきます。

……クラウドさんじゃないですよ？

修行風景と温泉へのお誘い

「重力の倍数上げる？」

「おう、頼むわ……っ！」

以前と同様に海鳴の山にて、ヒロキは修行を行っていた。背中に引っこ抜いた木を二十本乗せ、指立て伏せの最中である。

前回と違うのはリーチエが結界を張り、魔法によって重力を操作して負荷を掛け、酸素濃度も薄めている事だ。

ちなみに重力はただいま通常の30倍、酸素濃度は通常4分の1。

過去に修行を行ったとある場所をイメージして環境を作ってもらったが、中々に上手くいった事にヒロキはある種の感動を覚える。

「じゃあ、上げるよ……80倍！」

「うぐは！？」……………5632……………5633……………5634……………5635……………っ！」

更に増した重みに汗をダラダラ流しながらもゆっくりじっくり体を落とし、上げていく。

だが、いきなりプラス50倍は無理があったのか……

「6000……ぐへうつ！」

「うわ、潰れた。大丈夫ー？」

6000回を超えた辺りで、言葉通りに潰れた。そりゃもうグシヤツと。

とりあえずリーチエは声を掛けつつ、重力魔法を解除する……死んでないよね？

すると、やはりプルプル腕を上げながらも「死んでない」と自己主張しだした。あー、よかった。

「……大丈夫だ……けどよ、ちょっと……キツイわ、やっぱ」

「そりゃ50倍だからね。それだけ喋れば十分じゃない？慣れればもつとイケるよ、きつと」

「どうしてお前が慣れているのかがまったくわからないんだが……」

いや、本当に何でコイツは慣れてるんだ？そんな疑問を本気で考えたヒロキだが、どうせ聞いたところで、

「女の子には秘密があるの。特に私みたいな美少女にはね！」

こんな感じにウインク付きで返されるだけだ。というか前回に同様の質問をしたらこう返された。

とりあえず気を全身から噴き出して背負っていた木々を飛ばして、のっそりと立ち上がる。

立ち上がったら立ち上がったで刀を手に取り、

「——火よ、渦巻け！」

気合と共に右手で一閃。そのままの勢いで屈んで下段、中段、上段へと続く回転斬り。更には両の逆袈裟、そして強く踏み込み、突きで締めとする。

刃には火が纏い、熱気が腕を伝う……地味に熱い。

「赤城一刀流剣術 奥義之三・封輪火斬ふうりんかざんってな」

「いつ聞いても、変な名前だよね……………」

「やかましいわ！俺だってそう思ってたんだよ！」

そう、割と本気で思っている。

ヒロキが扱う剣術は『赤城一刀流剣術』縮めて『赤城流』というのだが、他にも封輪火斬同様に妙な名前の技が多い。

……いつか自分が死んだら、名前について赤城流の開祖に文句つけてやるう。そう固く誓ったヒロキだった。まあ、まだ死にたくはないのだが。

「しかし、やっぱり俺は未熟だなあ……」

「私は剣はよくわからないけど、凄いと思うよ。
でも、まだ改善点があるの？」

「ああ、まだまだ一杯あるさ。

今の技、師匠なら今の回転斬りをどういうワケか“同時”に出す
からなあ……火の練度も足りんから、まだまだ未熟だよ」

「上、中、下同時に？……どんな人間よ、そのお師匠さんは？」

「普段は陽気な人だったよ。

……とりあえずは精進あるのみだけだな、これが」

リーチエに笑いかけ、また黙々と刀を振り出す。

剣術の型の動きを反復させるヒロキ、その太刀筋は洗練されている
とはお世辞にも言い難く、しかし鋭いという矛盾のある太刀筋だ。

そんな彼の姿に、リーチエはイマイチ浮かない表情をしてその姿
を見ていた。

ヒロキの剣術の師匠。その話をした瞬間と自分に笑いかけた瞬間
に彼の表情が歪んだのをリーチエは見逃さなかった。

前者の方は悲しみ、これはまだいい。

だが、後者は——“何か”への狂気と憎悪を感じる笑みだった。

かれこれ2年間、長いようで短い時をヒロキと行動を共にしてき

たリーチエ。

そんな彼女でもあのような表情は見たことが無く、衝撃を与えるモノだった。

——そして今の彼の姿を見て、不安も感じた。

「……………ねえ、ヒロキ？」

「……………んー、何だー？」

振り向く顔はいつもの通り。先程感じた狂気は無い。
…………その事に若干の安堵と共に自分への嫌悪を感じる。

「（何考えてんだろ、私…………）」

うつん、なんでもない！ゴメンね！」

「？……………そうか、わかった。俺に惚れたか？」

何の取り留めも無い冗談。ただ、自分を見る彼女の顔が暗かったから言ってみただけだ。

笑って否定をするだろう。そう予想したヒロキだが——

「うつん、惚れてるよ？」

「ハハッ、冗談だよ……………って、はああああ！！？」

——冗談で言った筈なのに、笑顔で肯定されちゃいました。

「私はヒロキが好き。それは嘘偽りの無い私の想いだよ」

「え、ちょ……え？」

「ヒロキの想い、私に聞かせて——？」

間違いなく予想の斜め上、というか天元突破だ。

リーチエの潤んだ瞳の問い掛けに、ヒロキはトマトもかくやという程に顔が赤く、その体もブレて……あれ、何かおかしい。

「って、一体どうしたの!？」

「いや、こういう展開は初めてでさ………うん、予想外だわ」

「だからってバグる意味がわからないんだけど!？」

まるでどこかの最強の学級委員の如く、体にノイズが掛かるヒロキ。というより、逃げようとする足と留まろうとする足が動き合いステップによる残像でこうなっているのだが……この男、中々にヘタレである。

「お、俺……俺は………」

「……なぐんてね！冗談！」

「は？………だ、だよな！」

思い切って言おうとすると、表情を一転させたリーチエに阻まれた。

笑顔の言葉にヒロキはとりあえず同様に笑顔を作り、応える。

喜んだらいいのやら、悲しんだらいいのやら……顔で笑って腹で泣く羽目になってしまった。

昂った感情を沈める為に一心不乱に刀を振る。そんな彼を打って変わって暖かい笑顔で見守るリーチエ——その時不意に、ヒロキの携帯電話が鳴り出した。

画面に映る名前は『エンツォ・フェリーニョ』。リーチエと出会った2年前よりも前の年から世話になった、とある世界の情報屋の名前である。

ヒロキは急いで通話ボタンを押す。今までの恥態をごまかす為にそりゃもう急いでポチツとな。

「も、もしもし！？」

『おう、ヒロキ！お前からダンテに何とか言ってやってくれ！オレたちの親切で持っていてやった依頼を全部蹴りやがる！』

開口一番に耳に響く大声。思わず携帯電話を耳から遠ざけてしま

うくらいだ。

このエンツォという男、ヒロキの記憶では背丈の低い小男だった筈だが、どこから出ているのか真剣に問い詰めたくなる程の音量だった。

それだけ頭にキテるという事だろうか？

「ま、まあ落ち着けてエンツォさん。

トニー……いや、ダンテのその癖はいつもの事じゃないッスか。今更俺に言われても困りますよ」

『昔はよく組んでたじゃねーか！

さすがのアイツも、お前さんの言葉なら聞くだろ？』

「……本当に聞くと思ってます？我が道突き進むあの男が」

思い出すだけでも溜息が出てくるダンテの行動。

彼がまだ『トニー・レッドグレイヴ』と名乗っていた頃、エンツォの言葉の通りに便利屋として生きていたヒロキは同業者のダンテと組む事が多かった。

だがヒロキが相棒というわけではなく、本来彼には『グルー』という相棒が居たのだが。

で、以下が初めてコンビを組んだ時の風景。

「トニー！アンタ、どこに行く気だ！

もう依頼はこなした……って何だコイツら？」

「掃き溜めのゴミ共さ。俺はさしずめ専門の掃除屋^{スワイパー}ってところだな」

「シティー。ンターかよ！？って、置いてくな！」

「Let's start the crazy party（イカれたパーティーを始めようぜ）！！」

「勝手に行くなトニー待てやコラアアアアッ！
んでもってお前等は退けええっ！！」

依頼内容をこなしたら悪魔が出てきて、ダンテが嬉々として突っ込みヒロキは置いてけぼり。

二つのハンドガンマシンガンの如く連射してブツ放すダンテに巻き込まれないように、ヒロキは刀で後ろからサクサクッと斬っていく地味な作業。

……そして、ダンテが葉莢が詰まり排出されなくなった銃をブン投げて捨てた際に、悪魔へと飛び掛かった自分の鼻面に直撃したのは忘れられない思い出だ。

『……………だよな。いくらお前さんでも……………』

「そーいう事ですよ……………あー思い出したら腹立ってきた。
まあ、今度行くんでその時にでも言ってみますよ」

苦笑をしながらも、妥協案を出してみる。過去に色々世話になったので、少しは恩返しをしなければ罰が当たるといふものだ。

『いやー、悪いな！ダンテの奴も、少しはオレツちの言うことも聞いてほしいもんだぜ。』

そうだ、ちよつとお前さんに頼みてえ——」

——ブツツ、と通話を切る。

頼まれた事は聞くが、今は依頼遂行の最中だ……こうやって修行しているが。

というわけで、聞く気はなかった。

「エンツォは何の用件で？」

「ダンテが自分が回す仕事を受けないから何とかしろってさ。

俺に言われても困るっつーに……この仕事を終えたら行ってみるよ」

「あらら……」

まだ行ってもいないのに疲れたように答えるヒロキに、苦笑を禁じ得ないリーチェ。実力は高いのだが、気に入った仕事以外は受け付けない男。それがダンテである。

「とってもいい男なのに……傍から見たらダメ人間だよなー」

「言ってるやんな。ダンテにも事情がある……と思う。」

それとケータイ鳴ってるぞ、リーチエ」

「嘘っ！？……あ、美由希からだ！」

顔を綻ばせ、通話ボタンをプッシュ。聞こえてきた声に更に笑顔が深まる。

……どうでもいいが、バイブレーションも鳴っていないのにどうやって気付いたのだろうか？そんな疑問がリーチエの頭を一瞬だけ過ぎった。

『リーチエ、今大丈夫かな？』

「うん、大丈夫だよ。どうかした？」

『実はね、ヒロキも一緒に二人を誘いに電話したんだ』

「——海鳴温泉？」

「うん、美由希のお父さんの土郎さんと、お兄さんの恭也も是非って」

「士郎さんつてのは翠屋のマスターの名前だったな……だが、何でだ？」

「……多分、ユーノ君が発案じゃない？
私達がなのはちゃんを助けたって彼女に言っつて、なのはちゃんに呼んでもらうように言っただんだと思う」

「ああ……目的は同じだからな。信頼出来るか否か、ここで見極めるって事が」

本当に9歳かという考えである。だが、妥当な考えだ。
いくらあの時に助けたとはいえ、こちらの真意も明かしていない上に同じくジュエルシードを集める以上、ユーノもヒロキ達を信じるワケにはいかないだろう。

こちらの良い機会を得たと考えた方がいいだろう。

「……そして、恭也さんか。また話せるな」

「え、知り合い？」

「いや、翠屋で働いてただろ……寡黙だし、イケメンだし、剣もやっつてるらしいからな。色々と聞けそうだ」

親子揃って美男とは羨ましい限りだ。それにどちらも剣の腕は恐らく自分以上だとヒロキは推測する。

——湯舟に浸かってじっくりと話したいな。そんな考えを持つヒロキとは対照的にリーチェは、

「（……じゃあ私は、美由希やお母さんの桃子さんの胸を……ふふっ、楽しみだなあ」

「……………口に出てんぞ、お前」

「うえ?!」

「うえ?!」って何だ、“うえ?!”って

呆れたように呟くヒロキ。相棒は自重する気は全くもって無いらしい。

行ったら行ったで注意するように言っておこう。でなければ子供の情操教育に悪そうだ。

「じゃ、行ってくて事で決定だな」

「りょーかい!美由希にメール送っておくね!」

次なる舞台は温泉地。そこで二人は——

「……それと、自重はしろよ？セクハラで訴えられない範囲でな」

「えー？ぶーぶー！」

「ぶーぶー言うな、ダメな事はダメです」

——こんな感じで大丈夫だろうか？

その頃テストロッサチームは、

「温泉……？ハッ！そんなの興味ないね」

「何言ってるんだい！そこにジュエルシードがあるかもしれないんだよ！？」

いがみ合う使い魔とサイヤ人。目の前で繰り広げられる光景に、
フェイトは頭が痛くなる。

……どうやらこの二人は本格的に仲が悪いらしい。

「もう……二人共、ケンカはダメだよ？
アルフもギーネも落ち着いて、ね？」

「「ガルルル……ッ！」」

あ、ダメだコイツら聞いてねエ。

まるで犬が威嚇するように喉を鳴らす二人。一人は犬（というより狼）だが、一人はやつちゃダメだと思う。

「……バルディッシュ」

《Yes , s i r 》

今だにいがみ合う二人に向け、バルディッシュを向ける。

……ちょーつとお仕置きが必要らしい。

窓を開けて、魔法陣が展開され、電光が先端に集まる。

魔力を充填させ、3、2、1……はい、どうぞ。

「サンダー……スマツシャアアアツ!!」

「フエイトオオオオオオオ!?!」

「いやあああああああ!?!」

電光が雷光へと変わり、二人を飲み込み吹き飛ばす。ついでに家具も吹き飛んだ。

すっきりした気分とすっきりした部屋に、体を大きく伸ばしてフエイトはベッドに横たわる。

「ちょっとやりすぎたかな？……後で謝ろうかな」

ちよつとの範疇を超えているのだが、彼女は気にせず目を閉じる。

——温泉に入ったら、二人も仲良くなると良いな。

そんな優しい想いを心に秘めて——

修行風景と温泉へのお誘い（後書き）

はい、DMCキャラはエンツォと過去のダンテでした。
名前ですが、グルーも登場。

温泉行ってバツタリ出会ってビックリ！なんて展開も考えたのですが、やっぱりこっちがしっくりきたのでお誘いという形になりました。

剣術の技の名前はムゲフロの零児兄さんを参考に……病的な名前になりましたがw

エンツォの口調ってこんな感じだったかな？結構不安です。

御感想、御指摘などお待ちしております！

番外編 サイアクなユメ（前書き）

温泉での話を書いていたのですが、どうにも進まなかったなので気分転換に書いてみました。

皆さんも知るであろう“あの人”が出てきます。

番外編 サイアクなユメ

「《明日の温泉に備えて早めに寝ただけだな……どこだよ、ここは！？》」

目を開くと、寝室ではなくどこまでも血に濡れ、数多の屍が横たわる草原にヒロキは居た。

寝ていた筈の自分が何故このような場所に居るのか？
知らない筈の風景に、心のどこかでは既視感を覚える。

——そう、ここはかつて見た夢の風景である。

今、ヒロキの目の前には大剣を振り回し、台風の如く暴れ回る男の姿があった。

「オオオオオオオオオオッ！！」

咆哮を上げて一人の金髪の男の頭を掴み、集団へと投げ飛ばす。
集団が瓦解すれば大剣をブン回して生まれた真空波で斬り刻み、噴き上がる血飛沫が男を濡らしていく。

その隙を突いてか、機兵より放たれた十数発の銃弾が男の背中を存分に食い荒らす。

前につんのめるも踏み止まり、口から血の塊を吐き出しながらも男は機兵を両断し、未だ消えない闘志を瞳に宿して溢れ続ける敵を

睨み付ける。

既に全身は血に塗れ、返り血か彼の血かは判別は不可能。それでも男は止まらず、ただひたすら進む。

相手が男であろうと、女であろうと、子供であろうと、老人であろうと、機兵であろうと、悪魔であろうと、文字通りに斬り開き、突き進む。

何時しか、その瞳からは赤い雫が流れていた。

彼だけではない。全てとはいかずとも、対峙していた“モノ”達もまた涙を流していた。

誰が何者か。それはヒロキにはわからない。

だが、眼前の男にとっては何かしらの繋がりがあったのだらうと、いうのは感じていた。

「ガアアアアアアアアッ！！」

涙を隠すように、込み上げる感情を揜伏せるように獣の如く吠える。

しかし涙は止まらず溢れ、頬に付着していた返り血を洗い流す。

——血と一緒に、この痛みも流してくれ。今は……今だけは俺を戦うだけの兵器にしてくれ——！！

ヒロキの頭に流れ込む男の声。泣き叫ぶような悲痛な声が頭の中で響いて止まない。

だが、その声を聞いたヒロキの心の中で生まれた感情は――

「（……………ふざけんなよ）」

――“怒り”だった。

「（アンタとそいつらがどんな関係か、俺は知らない。きっと昔の仲間か友達か、そんな関係だったのかもしれない。

……………だけど、アンタは一人の女を選んだんだろ？

女を護る為に、今こうして戦ってるんだろ？

だったら……………泣き言なんか言ってねエで、後悔してでも戦えよ！！）」

声は出ていない。けれどもヒロキは確かに叫んでいた。

何故こんな言葉が出たのかわからない。勝手に口が動いたのだ。

届く筈もないのに、何故叫んだのかもわからない。ただ無性に腹が立ち、言ってやりたかっただけだ。

この男に関して何も知らない筈の自分が、何故ここまで感情的になったのかもわからない……………わからない事だらけだが、一つだけ理解した事があった。

――俺はコイツが嫌いだ。

男からすれば、ヒロキの言い分は勝手極まりない言葉だろう。
決意したとしても、いざ戦いが始まれば、やはり悔いが生まれる。

「後悔しないように」「悔いを残さないように……」との言葉があるが、そういったモノはどれだけ無くそうと努力しても生まれるのだ。

ならば、どうすれば良いか——その答えは人それぞれだろう。

声は出ていなかったのだが、思いっきり叫んだ事によってに高ぶった感情を鎮める為に、目を閉じて深呼吸をする。

吸って、吐いて、吸って、吐いて、吸って、吐いて……それを5回程繰り返し、閉じていた瞼を開く。

——風景が、変わっていた。

血に濡れた草原は固い砂の地面に、周りを見渡せばビルが、噴水が、花壇が、ベンチが見える……ここはどこかの公園だろうか？

「どんな場面転換だよ……って、声が出てる」

おー、声が出せるぞーと嬉しそうに呟くヒロキ。端から見れば不審者だが、先程まで出せなかったのだから仕方がない。嬉しいんだから仕方ない。

とにかく、ちょっとベンチに座って休もう。そう考えて振り向くと——

「……………」

「……………ええ？……？」

ベンチに座る青いツナギを着た“ウホツ！いい男”にどこか期待が籠った目で見つめられていた。

視線が合い、更に籠った期待の色が強まるのを感じたヒロキ。

視線は逸らさず、自分の記憶を振り返り男と関係を思い出してみ
る……も、どう考えても初対面なので、声を掛けてみようと考えた。

「あの……俺とどこかでお会いしましたか？」

「いいや、初対面さ」

声を掛けた結果、やっぱり初対面だった事が判明。ならば今も投げ掛けられるこの視線は何なのだろうか？

「じゃあ、俺が一体「なあ、少年」………なんですか？」

見事に話を遮られ、ちよつとだけ落ち込みながらも聞いてみる。
さつきから嫌な予感がするが、気のせいだと思い込みながら。

すると“いい男”。何を思ったのかツナギのボタンを外し、胸元をはだけて、

「やらないか？」

そんなふざけた事を言いやがった。

……アレ、これって結構ヤバイ？意外な事の大きさにヒロキは答えず振り返って逃げようと駆け出す——が、時既に遅し。

見事に腕を掴まれ、公衆トイレへと連行されて行く。

その手腕、正しく光の速さと書いて“光速”と読む程の動きだった。

本来ならば気を噴き出しいい男を吹き飛ばすか、魔力をぶつけて昏倒。何だったら力任せで掴んだ腕を引き千切ってでも逃げていただろう。

だが悲しいかな、某アンパンの戦士のように弱点を突かれたという事ではないのに力が出ない。

個室へと連れ込まれ、蓋の閉じられた洋式便器の上に座らされるヒロキ。

いい男はボタンを外して上半身裸となり、ズボンのチャックへと手を掛け——

「いやいやいや待て待て待てエエエエッ！」

何この状況！レイ。寸前貞操の危機ってなんなんだよ！？

俺はそっちの趣味はねーから！普通に女が好きだから！

何故だろう、今のこの状況に比べたらあっちのバイオレンスな場所の方が数百倍可愛く見える！」

「可愛い……ね。そんな事言われたのは初めてだぜ。
中々に嬉しい事言ってくれるじゃないの」

「アンタには言ってるんだよどんな耳してんだよオオオオオオオオ！！」

……って、オイ！そんなモノ出してんじゃねーよ仕舞えよ！？
その笑顔でにじり寄るなって……いやホントにマジで勘弁してください300円あげますから！」

「男は度胸。何でもやってみるものだぜ？」

「全力で拒否するわ！度胸だけで出来るかあっ！
く、来るな……来るなああああああ——————ッ！」

——アッ——！

「ぎゃあああ——って、あれ？」

絶叫しながら跳ね起きると、そこは自分の寝室……どうやら先程までは夢だったらしい。

夢で良かった、本当に良かった……！
汗に濡れた額を拭い、一息吐く……と、何故か隣にリーチェが寝ている事に気付く。

「……まったく、しょうがないな」

小さく笑みを浮かべて、眠る彼女の赤い髪を優しく梳けば、くす

ぐったそうに身を振る。

しばらくそうしていると、リーチェが何かの本を持っているのに気付く。

ちよつとした好奇心から、起こさないようにしながら手から本を抜き取る。……で、すぐに後悔した。

本のタイトルは——『くそみそ体験記』、表紙には夢に出たい男の顔が書かれている。

夢の内容を覚えているのはヒロキにとって驚きだが、それも全部ブツ飛んだ。

「うわあああああああああ！？」

狂ったように叫び、手にした本を窓より投げ飛ばす。ベッドの傍らに立て掛けておいた愛刀「^{スミレ}堇」を引き抜き、何度も振って鎌鼬を飛ばして斬り刻む、そりゃもう何度も何度も斬り刻む。

空間ごと斬るなんて芸当は出来やしないので、ブンブン振って細切れにしたら刀は放り投げ、気弾を掌より生み出して消滅させていく。

「——んー、もう！うるさいなあ……って、あ————っ!？」

叫んでやってれば、当然リーチェも目を覚ますわけで。

消えていく紙片を目の当たりにして呆然。対照的にヒロキは一仕事終えたような清々しい顔をしている。

この恨み、晴らさしておくべきか……？ 答えは“否”だ！

「グラッフルバインド！」

「は？ え、ちよっ……」

「サンダーブレエエイクツ！！」

「ぐれーとまじんがーっ！？」

掴まれた魔力の腕から流れ込む高圧電流に身体が痺れる。よく見ればリーチエの瞳には涙が浮かび、キツとヒロキを睨みつけている。

「図書館に居た茶髪の女の子に教えてもらった私のコレクションをよくも……ッ！

ヒロキが！ 泣くまで！ 流すのを止めないッ！！」

「のおおお更にパワーアップだと！？

あばばばば死ぬ死ぬ死ぬうううッッ！！」

その後、近接戦にて見事ボコボコにのされたヒロキ。

気絶した際にまたもやいい男が夢に現れ、その日は休まる事が無かったという。

番外編 サイアクなユメ（後書き）

夢の中で挿った瞬間、ヒロキは目が覚めました。

というわけで、出されてはいません！

何が？とは言っちゃいけない！

テンションの赴くままに書いた結果、こんな出来になりましたw
さっさと温泉編も書けて話ですけどね……

御指摘、御感想お待ちしております！

人、それを「波乱」と言う……！（前書き）

タイトルはロム兄さんの口上風にやってみました。
それにしても、一ヶ月近く本編更新しなかったんだなあ……

人、それを「波乱」と言う……！

向かい合う男が二人、睨み合う。

男の一人は高町恭也。高町美由希、なのはの兄にして古流剣術『御神流』を修める守護の剣士。

もう一人はヒロキ・アカギ。剣術と拳闘で生きる便利屋。

そんな二人の姿を見守るは恭也の家族である高町家。

彼の彼女である月村忍率いる月村家。

彼の妹の親友 アリサ・バニングス率いるバニングス家。

そして、ヒロキの相棒であるリーチエ・アウラードである。

「……………では両者、構え！」

響くような士郎の声に、二人は同時に構えを取った。

一見涼やかな風体だが、さながら刃のような闘気を静かに放つ恭也。

その眼光もまた鋭く、水のように静けさと炎のような熱さを秘めた光を湛えている。

肩や手首を回し、荒々しい闘気を隠さず立つはヒロキ。

勝負の刻を今か今かと待ち続け、ぐにやりと口許を歪めている。

「永全不動八門一派・御神真刀流 小太刀二刀術——高町恭也」

「赤城一刀流剣術——ヒロキ・アカギ」

剣士として、戦士として戦う為に二人は改めて名乗り合う。
ここから先は言葉は不要。ただ腕で語るのみ——！

「だあッ！」

鋭い声と同時にヒロキが攻勢に出た瞬間、恭也は“神速”に入っ
た。

“神速”とは、御神の剣士が得意とする移動法。
己の認識速度を極限まで引き上げ、常人を超えた速度で行動、判
断、攻撃を可能とする一つの奥義だ。

初撃を鍛え抜かれた洞察力と技法で見切り、恭也は反撃へと出る。
ヒロキもまた恭也の技を見極め、反撃の一手を真つ向より迎え撃
つ。

常人ならば捉える事は不可能のスピードで動き、激しい攻防を繰
り広げる二人。

見守る中でその姿を視認出来ているのは恭也同様に神速の世界へ
入った彼の父の士郎、妹の美由希、そしてリーチエのみ。

「はあああああ——っ——！」

——御神流 奥義之六・薙旋なぎつむじ——

高町恭也が最も得意とする超高速四連撃。本来は抜刀術であるのだが、一度獲物を収めればその瞬間に攻め入られるだろう。

故に恭也はあえてそのまま放つ。一撃にほんの一瞬、刹那の時に
も勝利への意志を乗せて。

研ぎ澄まされ、申し分ない威力を秘めたその技にヒロキは歓喜し、
心中で最大限の敬意を表す。

本来の薙旋は抜刀術であることはヒロキも気付いていた。だから
こそ本来の形とは程遠い筈のこの技を、これほど見事に放った相手
を——

「（俺の持てる技でッ！！）」

——打ち倒してみせようではないか。

目には目を、歯には歯を。ハンムラビの復讐法の言葉に倣い、奥
義には奥義だ。

獲物を手にした右腕を引き絞って捩り、身体を弓のようにしなら
せ力を一点にのみ集中させる。

放つは刺突。自身の全身全霊にて相手の全身全霊を打ち砕く！

——赤城流 奥義之五・羽翔穿はしゅうせん——

「……………うわぁ」

零れた声は誰の物か。

ヒロキの獲物——ラケットの根本が折れ、彼の鼻に鈍い音を立てて直撃していた。

恭也の雑旋を受けたピンポン玉はテーブルの真ん中にてパツクリと四分割。手にしていたラケットも同様に折れており、雑旋の威力をありありと物語っている。

とどのつまり、二人は卓球にて勝負をしていたのだ。

「いやいやいや！おかしい！おかしいよ！

私達の知ってる卓球とは随分違うんだけど！？」

尤もなツツコミ。子供達＋ユーノも賛同するように頷いている。

「何を言う、美由希。これが男の卓球だ」

「そーいう事だぜ、美由希？これが剣士同士の卓球勝負ってヤツさ」

「限度があるし、それは二人だけでしょ！？恭ちゃんは神速使っちゃうし、雑旋まで！

ヒロキもヒロキで、突きって普通卓球ではやらないよ！」

確かにそうだ。平面ではなく角で、しかも真っ直ぐ突き出して打つなんて方法はテ。スの王子達以外はやらないだろう。

しかし、この男共はそれが当然と言わんばかりだ。

「私が間違ってるの!？」とシャウトする美由希、哀れ。

「《ユーノくん、今の見えた……?》」

「《全然……ヒロキさんの動きは前に見た事があつたけど、恭也さんって目茶苦茶だね。

あんな動き、魔導師でも出来る人はそうそう居ないよ……》」

ちよつと呆然気味のユーノとなのは。

出来たらおかしい。感覚速度を自力で引き伸ばす人間が居てたまるか。

……実際にユーノの眼前にそれを可能とする三人が居るのだが。しかも三人全員が、なのはの身内である。

「恭也、腕を上げたな……ヒロキ君、次は俺と勝負しないか?」

「とーさんまで!？」

「喜んで受けさせて頂きます、土郎さん!」

土郎のトンデモ発言（美由希主観）を鼻血を流しながら快諾したヒロキ。美由希は絶望した。

このままやらせれば、卓球台の崩壊では済まなくなる。そう考えた美由希は――

「そ、そうだ！私、温泉に入りたいんだ！皆で行こうよ！」

「……よし、行こうヒロキ！」

「俺は士郎さんと卓球やりてーの。先に行つててくれないか？」

美由希の咄嗟の言葉に賛同したリーチエ。

ヒロキは軽くあしらい、新たにラケットを手に――したら腕ごと掴まれた。

「行こうよ、ね？」

笑顔という名の、身の毛もよだつ氷の貌^{カオ}が眼前に広がる。

しかし、ここで折れたら負けだ。きつぱりと断るべきだろう、そう思い口を開く。

「いや、俺は卓球を……げはッ！」

最後まで言い終える事なく、リーチエの爪先が腹部へめり込んだ。前につんのめったら左腕で頭を引かれ、脇に抱える形でフロント・ヘッド・ロックの体勢。身動きが取れない！？

そして、リーチェはヒロキを中心に旋回をして――！

「必殺――トルネード型DDT!!」

「たわらばっ!？」

旋回の遠心力と自分の全体重を存分にし、頭頂部が見事に床へと叩きつける！

出来上がったのは頭から血を流して痙攣するヒロキ。効果は抜群だ！

最後は通常のヘッドロックで絞められながらフェードアウト。士郎と恭也、ユーノはそれを哀れに思いつつも敬礼で見送った。

DDTもヘッドロックも危険な技なので、真似しないでください。下手したら人が死にます。

余談だが、技掛けの体勢上リーチェのふくよかな胸へと顔がダイブという男にはかなり美味しい状況が出来上がる。

けれどもヒロキはその感触を感じる事なく、ビクンビクンと痙攣し続けるだけだった。

超頼もしい協力者の現れに美由希から安堵の笑みが零れる。

しかし笑っているのは美由希のみで、後はドン引きだが二人は気付かない。

そして二人に同調するように、

「……………じゃ、じゃあ私達も行くわよ！」

「えつま、待ってよアリサちゃん！」

「《……………行こっか、ユーノくん》」

「《そうだね、なのは……………》」

「行きましょ、恭也……………なむあみだぶつ」

「わ、わかったから引つ張るな……………それにしても、生きているのか……………？」

わざとらしい演技で歩いていく子供達に、大人達も付いて行く。
……………それよりも、まだ温泉入ってなかったんかい。

で、こちらは男湯。

「ふうっ……………いい湯だ」

「ああ、そうだな……………というか、よく生きていたな」

頭にタオルを乗せて素直な感想を述べ、ぐでーっとへたれるのは

ヒロキ。今までの疲れが流され、体がリフレッシュされるのを感じる。

ヒロキの感想に共感した恭也も、冷静かつ無表情の多い彼とは思えないくらいに表情が緩んでいる。

先程の惨劇？は忘れる事にしよう。

ちなみにユーノは風呂桶の中。湯を張ってそこで堪能中。時々ヒロキが湯を掬って掛けてやる。

高町士郎は……奥さんとよろしくやっているだろう、きっと。

「……しかし、中々の腕だった。良い勝負をさせてもらったよ」

「いえ、恭也さんに比べればまだまだですよ」

「謙遜することはない……だが、確かにまだ技術が足りないな」

恭也の指摘に肩を竦めるヒロキ。尤もな意見だと彼自身も考えているからだ。

現時点で二人の剣術の腕は、恭也に一日の長どころか十日の長の差があるだろう。つまりは、それほど腕の差があるということだ。

「師匠は居るのか？」

「死にましたよ。確か……俺が9歳の時に」

「……………すまない」

罰の悪そうな顔になる恭也に、気にしていないとばかりにヒラヒラと手を振るヒロキ。

だが、その仕草は虚偽のモノだと恭也は見抜いていた。

「（今の眼は、昔の美沙斗さんと同じだ。

ヒロキもまた、復讐の為に剣を握るのか……？）」

彼には『御神美沙斗』という叔母が居る。

彼女は過去に全てを捨てて復讐の道を歩んでいたが、仇に逆に利用されていた折に恭也と美由希の活躍により、『香港国際警防隊』の一員として生きるようになった。

故に恭也は、先程のヒロキに既視感を覚えたのだ。

「恭也さん、どうかしましたか？じつと俺を見て……もしかして、俺に惚れました？」

「寝言とは寝ていなくても言えるのだな。勉強になる」

「ひでえ！？」

——だが、その時は俺達で止めてやる。妹の友人をその道に堕とさせはしない。

そう決意した恭也は、自分を案じて冗談を言ったであろう彼の頭

をガシガシと乱暴に撫でる。

「爪が頭皮に！傷が開く！」と言っているのは気にしない。

そんな騒がしい光景を、ユーノも微笑ましげに見守っている……と、

「《あー、あー……念話テスト。ユーノ少年、聞こえるかー？》」

「《あ、聞こえます……というか、よく生きてましたね》」

「《実は俺が一番生きていたのにビックリだったよ。そんな事はいいいとして……話があるんだ》」

こちらは女湯。 現在――

「お嬢さん、ええ乳しとるやないか」

「んう……やめてよ、リーチエ……」

リーチエによる美由希へのセクハラの真っ最中でした。

セリフがまるでスケベ親父だ。しかも、彼女の背後は死屍累々と
も言える様が広がり、なのはだけがその光景を真っ赤になりながら
も見ている。

どうやら美由希となのは以外の全員が犠牲となったらしい。アー

メン。

「あれ〜？気持ちよくないの〜？最初と声変わってるのに〜？」

「そ、そんな事——ひゃんっ！」

「……美由希、これはウソをついてる味だぜ？」

いきなりうなじを舐められ、身を震わせる美由希。彼女からは見えない背後のリーチエの顔が、一瞬劇画タッチになっているのを見た。

——で、3分後。

「さーで、ラストはなのはちゃんね〜……」

「な、なのははお断りさせて頂きたいのですが……」

ついに美由希もダウン。にじり寄るリーチエに後退るのは。美由希含め、全員の陥落に10分。その手腕に未来で「師匠」と二人の少女に呼び慕われる事になるが、それはどうでもいい話だ。

「なんてね。私は貴女と話がしたかっただけなの」

「私と……ですか？」

「そう。と言ってもお願いなんだけど……貴女の持っているジュエルシード、見せてくれないかな？」

その提案になのはの身が強張る。

ユーノから注意するよう言われていた提案が出されたのだ。

「……ジュエルシードを使ってどうするつもりですか？」

自分から出た低い声に若干驚きつつも、それを表面に出さないように問い掛ける。

聞かれた際の対応としてユーノより教えられたことは、「相手の目的を聞き出す」こと。

騙すことなく、ストレートに聞き出すことだ。

「目的？私は記憶を取り戻したいだけだよ」

「記憶……ですか？」

ストレートに聞いたおかげか、相手もまたストレートに答えた。しかし、記憶とはどういう事だろうか？

なのはが意味を考えていると、その様子に気付いたリーチェは事情を説明しだした。

自分には記憶が無い事。

その為にヒロキと共に世界を巡っている事。

そして、ロストロギアと呼ばれるジュエルシードに自分の記憶の手掛かりがあるかもしれない事。

それらの話を聞き、なのはは、

「……ユーノくん相談してから、決めたいと思います」

「！ありがとう！」

リーチェにとって色良い返事を返した。

高町なのはは心優しい少女である。誰かが困っていれば、迷う事なく手を差し延べる優しい心の持ち主だ。

リーチェもその性格に気付いている。だからこそ、彼女も偽る事なく目的を伝えたのだ。

真っ直ぐに向き合い、真っ直ぐに伝えたからこそ、なのはにも届いたのだろう。

「（……でも、なーんか見てて危なっかしいのよね……）」

話していて何となく抱いた感想。今は漠然とした感じだが、これが何らかに繋がらないように願う。

「ま、その時は私達が助けてあげればいいかな」

「え？どうかしましたか？」

「んー？……ふふっ、やっぱりなのはちゃんの成長具合も確かめたいなーってね」

蕩けるような笑みを見せるリーチエと対照的に、凍り付いた表情のなのは。

そして

「にやあああああ——つ！！」

館内になのはの悲鳴が響き渡った。

その時のリーチエのコメントは「将来性バツグン。きつとこは超える」だそう。

「……
 ったく、
 どうして犬なんかと来なければならぬんだか」

「それはアタシのセリフだよ。それと犬じゃない」

仏頂面で歩く二人の女性。お分かりだろうが、アルフとギーネで

ある。

なのは達よりも早く温泉に入った二人は既に浴衣姿。二人共プローションが良いので、意外にも色気がある。

……ギーネは普通に尻尾を腰に巻き付けている。そのせいか妙に視線が集まっているのをアルフは感じていた。

「アンタじゃなくて、ターレスだったらなア……」

「はいはい、悪かったね……ん？あれは………」

ふと何かに気付いたアルフ。ギーネもアルフの視線を辿ると、ちよつと遠目に5人組＋1匹が歩いている。

何と言うか、色とりどりだ。並んで歩く茶、金、紫。その後ろには赤と黒が歩いている。

その正体は言わずもがな、なのは達である。ちょうど温泉を入り終えたのか、アルフ達同様に浴衣姿だ。

「アイツらがどうした？」

「……金と紫以外、前にジュエルシードを取りに来たヤツらだよ」

「へエ………戦闘力は、と」

左目に着けたスカウターで戦闘力を測定する。やはり戦闘民族サ

イヤ人としての性なのだろうか、期待が

電子音が暫く鳴り、期待に満ちた顔がだんだんと険を帯びていく。
何事かとアルフが聞いてみれば、

「ゴミばつかじゃないか……一番デカイ戦闘力が赤のヤツの86つ
てどついう事だい？」

とてつもなく低い声で返された。そう言われても、戦闘力なんて
知らないアルフにとってはどう応えれば良いかがわからない。

ちなみに他の戦闘力を聞いてみたら、茶^{なのは}が2、金^{アリサ}が4、紫^{すむか}が16、
黒^{クロキ}が78らしい。

高いのか低いのか、アルフには理解出来ない。

とりあえずむーっと考えていたら、隣に居た筈のギーネが絡みに
行っていた。

「って、あのバカ猿！」

慌てて駆け寄るアルフ。しかもギーネが聞いたらブチ切れそうな
悪態付きで。

——極めて近く、限りなく遠い世界ではアルフが絡みに行つて
いるのだが、それを見たら彼女はどんな反応をするのだろうか。

……何か、絡まりました。それがなのはの抱いた感想である。

目の前には、ガラの悪い黒髪の女が居る。なんかもうメチャクチャ睨んでくるし、妙に威圧感も出している。

「こんなガキが邪魔をしてるなんてね……今、ここで潰しておいたら楽かねエ？」

言葉も物騒極まりなかった。

「アンタ、一体誰よ!？」

「ギーネ。よろしく」

「あ、私はアリサ。よろしく……って違ーーう!！」

思わず自分にツッコむアリサ。後ろでリーチエが「ノリツッコミ!？やるわね……」と言っているのが無視。

なのは身に覚えが無いのであたふたしている。そりゃいきなり「潰す」何て言われればそうなるだろう。

「なのはちゃん、この人知り合い？」

「うつん、知らない……あの！私が何かしましたか？」

「何言つてんだい？ウチの子にアレしてくれたじゃないか」

ギーネと名乗った女の背後から、もう一人の女が現れた。オレンジ色の髪の子——アルフだ。

ユーノはどこかで見た顔だと頭を小さな手でトントン軽く叩きながら考え、それ以外は「誰、コイツ？」といった目で見ている。

「アンタも久しぶりだね、真つ黒頭」

「確かに久しぶりだな、犬娘。……んで、誰だっけ？」

「さっき自分で犬娘って言っただろ！それとアタシは狼だ！！」

気付けば視線の温度が上昇。生暖かい目になっている。
ややこしい聞き方だが、ヒロキは名前を聞いた。しかし、彼女は自分を狼と主張したのだ。『人間』の姿で。

どう見てもアレな人です、本当にありがとうございました。

それを聞いた瞬間にギーネとアルフ、実際に戦った事のあるヒロキを除いた4人+1匹は「ああ、そういう人なんだ」との結論に到るワケで。

その微妙なすれ違いに気付いたギーネは肩を震わせ笑いを噛み殺

し、わかってて仕込んだヒロキは新世界の神の様に笑い、アルフは突然自分に向けられた視線の変化に戸惑うばかり。

「……………覚えてろー！ーっ！」

遂には耐え切れず、捨てゼリフを残して撤退。ギーネは爆笑いしながらアルフを追い掛け、走り去った二人の後ろ姿をなのは達は見送る事しか出来なかった。

「な、何だったのよアイツら……………？」

「さ、さあ……………？」

「新手のお笑い芸人かな……………？」

「……………サイヤ人」

「「サイヤ人？」」

ヒロキの発した単語に思わず問い返すアリサ、なのは、すずか。

「あ、言っちゃった」的な顔をしてヒロキは逃げ出し、それを「待ちやがれゴルア！」と形容すればこんな感じの気迫で追い掛けたすなのはとアリサ、なし崩し的にユーノ。

取り残されたすずかとリーチエは、

「「……………バカばっか」」

二人同時に眩き、顔を見合わせる。

それが可笑しかったのか、そのまま二人は笑い出した。

食事を済ませ、床に着く時間となる。

夜も遅いので良い子は寝る時間であり、実際にアリサとすずかは既に眠っている。

現在部屋にて起きているのはリーチエ、なのは、ユーノの三人。

ヒロキは刀を持ってスタコラサッサと部屋を出た。大方修行へ行ったのだろう。

「ユーノくん……ちょっとお願いがあるんだけど、いいかな？」

「あ、ジュエルシードならヒロキさんから話は聞いてるよ」

「「え？」」

なのはの神妙な表情が一気に呆ける。ちょっと覚悟していたのだが、なんだか肩透かしを喰らった気分だ。

「じゃ、じゃあレイジングハート、お願い」

《Put out》

「わお、封印されててもスゴい魔力ね」

出てきたジュエルシードは暴走しないように封印されていても、
とてつもない魔力を内包していた。

リーチェは浮かぶ六つのジュエルシードの内の一つを手にとると、
目を閉じ、それを胸に抱く。

「それじゃ、解析……スタート！」

その言葉がトリガーとなったのか、リーチェの頭に情報が流れ込む。
む。

何故ジュエルシードが作られたか、

何故これほどまでの魔力が必要だったのか、

様々な情報が流れ込む中、それらを瞬時に解析して理解し、目当ての情報を探し出す。

「……………ふうっ！」

一息ついて、目を開ける。開けた視界には期待の籠った目を向けるのはとユーノの姿。

リーチェは「にぱーっ」と笑顔を向けて、

「いやー、ハズレだったよ……しくしく」

「で、でもまだ五つ残ってるんだし……大丈夫ですよ！」

「それに、全部集めたら21個なんですから！」

二人のフォローがちよつと染みる。優しい子達だなあ、と思いいながらもリーチェは頷き、二つ目に手を伸ばした。

「シャアアアアッ！」

「どわっ！？……こんのオッ！」

その頃、修行に出たヒロキは見事に襲撃されていた。今回もやっぱり悪魔で、ブレイドの上位種——『フロスト』の大群に囲まれている。

抜き身の刀を右手に、鞘を左手に持ち、四方八方から飛び交う氷

の爪を屈んで、転がって、跳ねて、弾いて、避ける。

現在は浴衣姿な為、返り血で汚すワケにもいけないので反撃が来ないでいる。

土なら払えば落ちるが、血の脂は払っても落ちないのだ。

「俺に魔力があつたらな……！結界もバリアジャケットも思いのままなんだけど！

無い物ねだりしても意味ねーけどさ、つとと！」

「ガアッ！」

ぼやきながら錐揉み回転で突っ込んできた一匹の首を鞘で打ち据え、叩き落とす。

気で吹き飛ばすという手もあるが、結界を張っていない現状では不可能。爆発音によって騒ぎが起きるかもしれないからだ。

なので、防戦に徹するしか今は手は無い。かといってこれで状況が打開出来るというワケでもない。

「今頃リーチエは解析してるだろうし……期待出来そうに無いな。しかし、これでわかった事もあるからプラマイゼロってか？」

わかった事、それはコイツらもジュエルシードを狙っているという事だ。

一つ一つに強大な魔力が込められている為、悪魔の餌には最適なモノだろう。

……結構今更な感じがするが。

「シャアッ！」

「三倍速くはなれるが、赤くはねーぞ！」

無駄なツツコミを入れつつジャンプして回避すれば、三体同時に合計六発の爪が撃ち出された。

一発目、鞘を左に払って打ち飛ばす。

二発目、円を描く様に刀を回転させて弾く。

三発目、鞘を使って次は右に打ち飛ばす——も、衝撃に鞘が耐え切れず、飛ばしたと同時に折れた。

四発目、これも刀で弾くが、鞘みたいに折れたら嫌なので、口に啣えて使用を止める。

五発目、両手を組んで側面を殴り飛ばす。両手が凍った、結構冷たい。

六発目、右足で蹴り飛ばす。今度は靴が凍った。ちくしょう、高かったのに。

「うおう、寒い……かあっ！」

気を纏わせて凍った部分を溶かす。その際にちよつと刀を落としかけた。

だんだん暖まる手足を擦り合わせながら、フロストの群れを睨むと——空間が歪んでいる事に気付いた。

首を傾げながらも警戒を続けていると、

「Be gone——失せろ」

声が出たと同時にガインツ！という金属音が鳴り響き、空間の歪みが幾数の刃を生み出してフロスト達を斬り裂いていく。

至る所から血を噴き出して倒れ伏すフロストの群れ。それを見て、啞然と立つヒロキ。

数秒の沈黙を経て出た言葉は、

「な、なんか知らんが……ラッキー？って危なっ！？」

先程の斬撃に邪魔された。

なんとか転がって躲したが、どうやらこの攻撃は空間ごと対象を斬る技らしい。

多分物陰に隠れようと、それごとバツサリ斬られるだろう。

「（そんな芸当、師匠がダンテくらいしか出来そうに無いんだけど！？」

「つか、恨み買うような事した憶えはねーぞ!？」

「戦略的撤退イイ!」とゴロゴロ転がって林の中へと入っていく。それと同時に斬撃も止んだ。

辺りの地面は抉られ、月明かりがただ照らす中――男が一人、音すら無く現れた。

月の光を受けて輝く銀髪に、誰もが見惚れそうな端正な顔立ち。蒼いコートを身につけ、左手に一本の刀を携えた、フロスト以上の冷気を纏った男だった。

男は辺りを見回し、木々を、地面を、夜空を、月を一通り睨みつけて一言。

「……………どこだ、ここは？」

この男、絶賛迷子中だった。

「!これは……………ジュエルシード!？」

「なのは!リーチェさん!」

ジュエルシードの発動に反応したなのはとユーノ。なのはは待機状態のレイジングハートを手にしているが、リーチエからは反応が無い。

「リーチエ……さん？リーチエさん？」

「まさか、ジュエルシードを解析したから？
ジュエルシードの情報量に頭の処理が追いつかなくて潰れてしま
った！？」

なのはの呼び掛けにも応じず、俯くりーチエにユーノは最悪の結
果を予想する。

ふと、リーチェの肩が動いた。

「ふふ……くくく……くはははははっ……！」

「え……つと、リーチエさん？」

「まさか、発狂？」

何気に酷い事を言うユーノに、心配した顔のなのは。
リーチエは額に手を当て、肩を震わせ笑い続ける。止まらず、誰も止められない。

「……うけけけけけけけけけけけけけけけけ！」

「「ホントに発狂したー！ー！！？」」

《……It's crazy(……狂ってますね)》

文字通りの狂った笑いを上げるリーチエ。どうやら目当ての情報が無かったのが堪えたらしい。

レイジングハートすらツツコミを入れるこの状態、マジで狂ってる。

一通り笑っていたリーチエ。気付けば、

「……あれ、なのはちゃん？ユーノ君？」

辺りを見回すと、誰もいない。

——物の見事に置いてきばりにされていた。どうやら処理は不可能と判断したらしい。

というワケで『Wild Card』両名、遅刻決定。

人、それを「波乱」と言う……！（後書き）

蒼いコートの男は誰なのか！……バレバレですよ。

恭也は刃の潰れた練習用の刀でドラム缶を両断出来るそうなので、剣技はヒロキの数段上という設定にしました。

とらハ3のOVAでは4年後の設定でしたが、あんな動きの上に奥義ノ極である閃を使用していましたから。

高町士郎が生きているリリなのならば、とらハでの恭也よりは実力は上かと思いました。

……とらハ持っていないので、とら八大辞典見て調べたんですが（えー

技の羽翔穿は『西遊記』の芭蕉扇から付けました。これって大丈夫かな？

御感想、御指摘共にお待ちしています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2489t/>

彼と彼女の百年物語

2011年10月9日02時23分発行